
真・恋姫†無双『皇甫嵩伝』～野心無き名将～

flower

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双『皇甫嵩伝』～野心無き名将～

【Nコード】

N5110W

【作者名】

flower

【あらすじ】

後漢王朝末期におきた農民の大反乱『黄巾の乱』において最も戦績をあげ群雄として天下に名を馳せる機会がありながらも漢の一武官としてあり続けた男―皇甫嵩義真

彼が恋姫無双の世界で生を受けたとき世界はどう変化するのか

TINAMIさんのほうでも投稿しています

注意

この作品は処女作であり文章・構成・描写…etcでつたない部分がありますので生暖かい目で見守ってください

- 1、一〇十数話までは戦闘描写のない下準備(という名のフラゲ立て)が続きます
- 2、アンチ要素が多分入ります
- 3、原作スタート前から始まります
- 4、オリ主モノでオリキャラが大量発生します

主人公とオリキャラ達の紹介／ネタバレを含むかもしれない／

皇甫嵩義真（真名・空）

白銀長髪の十七歳（六話時点）の男の子、背は星より少し高いぐらい何？志学院の塾長にして水鏡女学院で初の男子生徒

特技は大体の物であれば狙い通りに投擲できること

いつも華琳の凶刃から逃げていたため反射神経と動体視力がつきぬけている（本人談）

逢紀元図（真名・蒼）

少年用の文官服に身を包んでいる蒼色の髪の子

気弱な為よく麗羽などに絡まれる

空の身代わりであり、良き友人であり、お互いを高めあうライバル大の大好きで空が身代わりにするときは毎回兵法書を買っているとかいないとか

諸葛瑾子瑜（真名・朱蓮）

黒色の七分袖のブラウスと膝と足首の真ん中の当たりまでの長さのスカート（いわゆるツー・パーツ・ドレス）で髪は金髪のセミロング（眼鏡は銀縁）

お菓子と読書が好きなのんびり屋（朱里がしつかり者のなったのはこの姉のせいと言われる）だが実は水鏡女学院では一番の秀才
口癖は「ほわわ」

この後荊州に隠れていた蓮華と出会いの母や姉に対する劣等感を見抜きそれを少しでも軽減するために仕える

諸葛均（真名・朱李）

黒色の長袖ジャージで金髪は朱里と同じくらいの長さ

姉二人が有名すぎて諸葛均と名乗れば「諸葛均？…ああ諸葛瑾ね」と言われ、真名朱李を預けようとする「朱里…均ちゃんふざけるの？それお姉ちゃんの真名じゃん」と怒られてしまうという不遇な人

口癖は「わわわ」

話題に出る時も『しゅり』とだけ言われるとどちらか分かりづらく司馬徽でもたまに分からなくなるが何故か空と咲里（後述）だけはどちらの事か理解でき空に至っては「朱李…ああ地味なほうか」と冗談で言う始末

一番苦労しているのはこの子かもしれない

徐庶元直（真名・咲里）

灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーター（どこかで聞いたことがある、見たことがある、読んだことがあるという方はスルーしてください）に薄い桃色の髪で小さな野球帽をちょこんと頭に乘せている

未だ真名を司馬徽と空にしか預けていない謎が多き少女

空を自分に似ていると言い真名を預けストーリーカーまがいのことをしている

主人公とオリキャラ達の紹介〜ネタバレを含むかもしれない〜（後書き）

紹介は後々増やしていく予定です

ブローグ、最初はこんなもの

ブローグ

??? side

向こうの軍団長らしき人物が号令を掛けると敵軍は一斉に突撃してきた

陣は蜂矢

なるほど悪くはない、・・・だが所詮は異民族

俺達の戦い方を真似たことは評価するが、その意味までは理解できないらしい

確かに蜂矢陣は騎馬の勢いを上手く利用できる陣だがそれはあくまで統率が取れた集団がからこそ話

戦とは個でなく集で勝つもの

それが理解できずにただ闇雲に突っ込んでくるだけでは俺には勝てんぞ

「伝令、中央に一旦退がるように伝えろ」

「義真様、それでは押し切られるかと」

「見てみる忠、敵の中央だけ他のところに比べて速い、良い馬を多

くまわされている、大方あそこが本陣だろう」

「それは見て分かりますが・・・」

「もし目の前に逃げ惑う敵がいたらお前だったらどうする？」

「それはもちろん速度を上げて・・・ハッ、そういうことですか」

「そう間違いなく速度を上げてくるだろう、∴他の部隊を置いてな」

「なるほど両翼の兵は囷、目的は本陣にいる敵の大將が狙い」

「別になにも敵全てに対処する必要は無いんだ、よほどの精兵であれば別だが大体の軍団は大將が討たれれば混乱する、∴そろそろ準備しておけ、我を忘れて追撃してきた馬鹿共にお前の力見してやれ」

「ハッ」

中央を下がらせると予想通り敵は速度を上げてきた

やはり馬の違いか、敵は中央が突出し陣が崩れていった

策（最も策と呼べるかどうかは微妙な所だが）が決まるのは嬉しい事だがこう簡単に決まってしまうとある種の虚しさをも感じてしまう

「今だ、反転しろ」

命令とともに反転し一斉に槍を突き出す兵達

予想もしていなかった反撃に敵の最先端にいた兵達が突き殺されそ

の死骸につまづいた馬によりさらに被害が拡大する

両翼を見てみれば命令通り七割の兵を残し反転

残された両翼の七割の兵は指示した通りに二度の斉射の後、槍袈を
展開

その目的はあくまで足止め

両翼から離れた三割の兵は綺麗に三分分され敵本陣の左、右、後ろ
に付きじわじわと追い詰めていく

!!!!!!

敵軍に動揺が走るのが分かる

そこに

「それがしは閻忠なり、御首頂戴いたす」

大型の斧を振り回しながら閻忠が突撃する

閻忠は道を遮る兵を薙ぎ倒し一直線し敵の大將の元へ

一閃

「敵将討ち取ったっ」

呆気なく戦が終わった

語り side

後漢帝国第十二代目皇帝靈帝は愚物中の愚物であつた

政務に目を向けず遊び呆けた事や十常侍と呼ばれた十人の宦官の重用した事・三公の地位ですら金で売買できるようにした事等々数え上げれば枚挙にいとまがないほどであつた

そしておよそ400年続いている漢帝国に二度目の乱世の風潮が漂つてきていた

だがそんな世の中にも子は育つ物であり、それを育てようとした人物はまだいた

洛陽に私塾を開く何？もその一人であつた

彼女はこれからの世がどうなっていくか、大体の予想がついていた

沢山の民が傷つき死んでいく未来が・・・

だからこそ彼女は子ども達を育て、見守り、調べていた

…乱世を治め、民を導く才能を持った人物を

そしてこれから起こる乱世という大波に乗り一気に飛躍し後の世に

語り継がれる人物の一人皇甫嵩義真は・・・

「…………ぐう…………すう……………」

・・・木陰で寝ていた

何？の評価、天才と凡人、

語り side

「ねえ、空」

「ん、どうした？」

「またいつか会えるよね？」

そう言った少女を軽く抱きしめる少年

「ああ、またいつか会えるさ」

「…そう、じゃあさよならは違うよね」

「ああ、違うな」

「…じゃあ」

少女は体を伸ばし少年に口づけする

初めての口づけだったのだろう少女はポツと顔を赤らめているそして小さな声で

「いってらっしゃい、空」

そう呟いた

少年はそんな少女に優しく口づけし強く抱きしめる

「いってきます、―」

それが彼らの一番古い記憶だった

（プロローグから四年前）

じりじりと肌を焦がす夏の日の日ざしでも、木の葉の色が日々変わっていく秋の日の日ざしでも木枯らしの吹く肌寒い冬の日差しでもなく

地獄で人を裁くという閻魔様もついうとうとと昼寝をしまいそうなる春のうらかな日ざしが降りそそぐ午後

「…すう…すう…」

少年は寝ていた

まだ幼さの残る顔つきと上等な絹を思い浮かべさせられるような白銀の髪、そしてその身から放たれている不思議な風格から初めてその少年を見た者は少年を王族か豪族の子だと勘違いするであろう

そんな少年に語りかける一人の少女

「――、起きなさい、空」

「…すう……」

「起きなさい、空」

「あと五分だけ…すう…」

「空、起きなさい」

「…むにゃ…うるさいな、俺は今寝てんだ……」

「起きなさいって言うてるでしょ」

「…ん？…おおう、華琳いくら護身用で武器を持ってくる事が許可されているからっていきなり人を切りつけるのは人道的にどうかと思うんだけど」

刃が首に届くぎりぎりのところで横に転がり避ける少年―皇甫嵩義真

「貴方がなかなか起きないからでしょ、今は授業中よ」

流石に剣で斬りつけたのは拙いと思ったのかすぐに鞘に戻す、華琳と呼ばれた少女―曹操孟徳

「授業中って先生が自習って言うてたし、別に良いだろう」

ゴロンとまた横になる少年

「良くないわよ、自ら習うと書いて自習なのよ」

「華琳、勉強で重要なのは多くの書物を読むことじゃないんだ、書物から得た知識をいかに応用できるかなんだ、孔子も言ってるぞ。

“朝聞道、夕死可矣。”

（朝に人としてなすべき道を聞くことができれば、その日の夕方に死んでも後悔しない。真理を求める尊さをいう。）ってな」

漢帝国の礎となっている儒教を使い主張する少年に対し少女は

「あら、孔子は

“少年易老学難成”

（若いうちはまだ先があると思つて勉強に必死になれないが、すぐに年月が過ぎて年をとり、何も学べないで終わってしまう、だから若いうちから勉学に励まなければならない）とも言ってるわ。

真理を求めるにしても多くの事を学ぶ事は重要よ」

孔子の言葉で主張してきた少年に孔子の言葉を用い反論する少女

この時点で八割ほどの確率で少年の負けなのだが、少年は負けじと返す

「……華琳、お前だって嫌な事を何度も言われるのは好きじゃないだろう。」

“己所不欲、勿施於人”

（自分が好まないことを他人に無理じいしてはならない）」

かなり強引に絞り出した感のある答えに対し少女は言い放つ

「私は勉強が嫌いではないもの。
今の私の言葉は

“ 忠言逆於耳、而利於行 ”

（忠告や諫める言葉は、とにかく聞く側の感情を害すものだから、
素直に聞き入れられ難い）
というのが適当かしら」

これにより少年の負けは決まった

例えるなら10000の大軍で2000の軍に挑み軍は全滅・指揮
官は捕虜になったぐらいの完膚なきまでの敗北であった

ここまで見事な敗北をした少年は・・・

「……………ぐう……………」

まるで何ごとも無かったかのように寝始める少年

それを額に血管を浮かび上がらせながら見下ろす少女

「寝るな」

「……………おおう」

少女が振り下ろしてくる剣を刀で受け止める

「痛ッ、手痛ッ、華琳の一撃重ッ」

「うるさい、黙って死になさい」

「死ねってそれが何？志学院塾長に対する言葉遣いか」

それから少年と少女の命がけの追いかけっこは日が暮れるまで続いた
そんな仲の良さそうな？風景を見ている人物がいた

年はまだ30歳半ばなのだが、彼女の自慢の白い長髪と穏やかな笑みからよく老人と勘違いされやすい、何？志学院の院長である何？
だった

（やはりあの二人ですか）

中庭を走り回る二人の姿を見ながら彼女は考えていた

空と華琳―皇甫嵩と曹操

もし自分の塾の生徒から世を治める可能性を持つ人物は誰かと聞かれれば彼女は迷わずこの二人と答えるだろう

華琳を一言で表せば“天才”

武力・知力・魅力

どれを取っても平均以上の物をだしてくる

さらに多くの物事に興味を持ち、それらを極めようとする

天に愛された者とはああいう人物の事をいうのだろう

空を一言で表せば“凡人”

生まれ持った資質はまさに一般人、何百人の中からはその輝きを見つけ出すことは不可能

だが決して侮ってはいけない

彼の強みは絶対に諦めぬ不屈の意思

十の努力で足りないならば百の努力で、それでも足りないならば千で、万で

どれほどの差があろうとも、どれほどの無理難題でも彼は決して諦めない

今の彼は華琳という目の前を走る大きな目標に追いつき追い越そうとしてひたすら努力した結果の賜物だろう

華琳が一を聞いて十を知ることの出来る天才ならば、空は一を聞いて三程度しか理解できない凡人だろう

しかしその三から努力し考え自らの手で十以上の物を作り出すことが出来る

どちらがより優れているかと聞かれても彼女には決める事が出来ないだろう

だがこの二人の性質は互いに異質

もし二人とも乱世で名乗りを上げるなら間違い無くこの二人は敵対するだろう

（まあ、それも乱世ですか）

その事に一抹の虚しさを感じつつも授業中に塾を脱け出した二人への罰を考える何？であった

何？の評価／天才と凡人／（後書き）

学生時代ということで論語を入れてみました

『少年易老学難成』から始まる偶成を書いたとされる朱熹は1130年に生まれたのですが後に儒教の一派（朱子学）を作るので無理矢理登場させ孔子サマの言葉にしました

橋玄の評価、天下を安んずる者と天を知る忠臣、（前書き）

今回は曹操の有名ではないほうの評価を書きます

橋玄の評価／天下を安んずる者と天を知る忠臣／

空 side

ボーン、ボーン、ボーン

鐘の音が学園内に鳴り響く

「もうこんな時間ですか、今日の授業はここまで」

それに気付き先生が授業を終える

「気をつけ」

「………ありがとうございました」………

「ふゝ、終わった終わった、今日は何しよかなあ」

今日の授業が全て終わり、背伸びをしていると

「空さん、今日私は叔母サマ（袁隗）の屋敷へ行くのです。

アナタのような貧相な家の出では入ることどころか見ることもすらがおこがましいのですが、今日は私の気分がいいので特別に連れて行って差し上げますわ、おーほっほっほっほ」

……ウルサイ奴が来た

基本的にはいい奴なのだがとにかく自分が四世三公の名家であることを自慢したがる

・・・俺個人としては袁家が四世三公として敬まわれているのは実際に三公なるほど努力した人を称賛しているわけでありそのことをなんの努力もしていない麗羽が自慢する意味が分らないのだが

正直なところコイツと話していると大体面倒な事に巻き込まれるので早めに逃げておく

「麗羽、悪いが俺は忙しいんだ・・・というわけで蒼^{あお}後は任せた」

こっそりこの場から離れようとしていた蒼―逢紀、字は元図―を身代わりにする

麗羽本人としては自慢できれば基本的に誰でもいいらしく

「では蒼さん、参りましょうか」

「嫌だ、助けて、そ〜ら〜」

ああ、可哀想にきつと袁隗さんの屋敷で袁家自慢を延々とさせられるんだろうな・・・合唱

「空、なにを太陽に向かって手を合わせてるの」

「可哀想な蒼に祈りをささげておる」

それだけで華琳はどういう事情か理解したらしく

「貴方、毎回蒼を身代わりにしてない？」

「ん？まあそうかも知れん、まあ兵法書でも買ってやれば大丈夫だろう」

蒼は話を聞くのが上手いしなんとかなるだろう

「ところで華琳何かようか？」

確か授業前に先生の所に行くように言われていた気がするが・・・

「先生から明日橋玄さんの所に行くように言われたわ」

「そうか・・・って橋玄さんの所に」

橋玄―字は公祖、桓帝・靈帝に仕え九卿・三公を歴任した実績を持ち靈帝からの信賴も厚い、ある事件で子どもを失ってから役職を辞任し靈帝から許可を貰い洛陽に私塾を開校、その生徒に曹騰や何？、司馬徽、盧植、孫堅などがいる（二割ほど噓）

実際に橋玄さんの生徒である何？先生を師事している俺にとっては師の師にあたる橋玄さんは尊敬すべき人物であり橋玄さんに会う事は俺の夢の一つであった

翌日

「うゝ、緊張してきた」

「あら、緊張するなんて貴方らしくないわね」

「そりゃ緊張の一つぐらいするだろう、憧れの人物に会えるんだからな、それに先生のおかげで会えるんだ…もし失態なんて犯したら先生の顔に泥を塗る事になるんだぞ」

スツと華琳の顔から笑顔が消える

「…分かってるわよ、そんな事」

そう俺達みたいななんの役職も持っていない一介の学生が九卿・三公を歴任したほどの大人物に会うことが出来るその生徒であった何？先生のおかげだ。

すなわち俺達の失態はそのまま先生の失態に繋がる。

今まで衣食住を保障しさらに勉強まで教えてくださった先生の顔に泥を塗る事など絶対にしてはならないんだ

俺達は今までにない緊張感で屋敷に入っていった

「よく来ましたね、私が橋玄です」

客室に通され待っていると現れたのは七十歳ぐらいの老人であった杖をつきながらゆっくりとしかし堂々と歩いてくるその姿は九卿・三公を歴任したというのも頷ける風格を持っていた

「皇甫嵩、字を義真と申します」

失礼のないように、そして気迫に飲まれぬように名を名乗る

俺が名乗り終わると華琳が名乗り始めた

華琳は緊張していないのか余裕のある表情でゆっくりと口を開き

「…曹操孟徳と申しましゅ」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

沈黙の時間が流れる

何処からか聞こえてくる鳥の鳴き声がいつそう哀愁を誘う

「・・・・・・・・・・。くすつ、ふふふふふ」

沈黙に耐えかねたのか橋玄さんが笑い始めた

「ふふふふふ、いや失礼」

「いえ、私が噛んだのが原因ですから」

そういう華琳の顔は見たことがないほど真っ赤だった

「話は道（何？の真名）から聞いています、なるほど確かにそうですね」

笑い終わると橋玄さんは一人で納得したように頷いた

「道からの手紙に『二人とも能力のある将来有望な子だから一度見てほしい』と書いてありましてね。

彼女が自分の生徒を手放しに褒めるのは今まで無かったのですね、では・・・」

と言うと橋玄様はじつと俺の顔を見つめる

「これは・・・少し待ってください」

そついうと橋玄さんしばらく黙って

「皇甫嵩君、君を見ていると色々な言葉が思い浮かびますが一言で言えばあなたは自らが凡人である事を正確に理解していますね」

うつ、自分でもよく分かっていたが人から言われると傷つくな

「・・・しかしあなたはそれを悲観することなくひたむきに努力していける人ですね。

もしこのまま研鑽を積み重ねこつこつと努力していけばあなたは森羅万象・天地万物の真理を知る事ができるでしょう・・・そしていずれは“天”を知りそれを自らのものとする事が出来るでしょう。しかしあなたは自らが得た“天”を自らの為には使わないでしょう・・・そうですねあなたを評価するならば『天を知る忠臣』がふさわしいでしょう」

「・・・はあ、そうですか」

『天を知る忠臣』か

そんな大げさなもの俺には似合わないと思うのだが

俺を評価するのならば一般人、よくてもせいぜい努力をし続けられる凡人ぐらいが相応だと思うんだが・・・

「逆に曹操さんは一言で表すのは難しいですね・・・そうですね最もふさわしい言葉は『天下を安んずる者』でしょうか」

「橋玄さん一つよろしいでしょうか」

「はい、どうぞ」

「天下を安んずるとは一体何をもって安んずると言うのですか」

考えうる方法は二つある

一つは橋玄さんのように朝廷の要職に就き漢帝国の内側から行う方法

もう一つは古の霸王項羽のように武力により漢帝国の外側から行う方法

ただそれは漢に対する反乱と同意義だ

「さあそれは分かりません、私に言えることはただ一つ彼女にはそういう才能があると言う事だけです」

「分かりました、失礼な事を聞き申し訳ございませんでした」

「いえ、本当ならばあなたのような反応をするのが当たり前です。それで気にしなくて結構です皇甫嵩君。」

それにしても…ふふ今日は珍しい物が見れました。

これからは十日に一度我が家に来なさい。久々に教鞭を取りたくありません。

それとあなたたちには私の真名“標”を預けます。これから宜しく願いますね」

「ありがとうございます、俺の真名は空です」

「私の真名は華琳です」

「ふふ、では今日はもう遅いですし帰りなさい」

気付けばもう陽は落ちていた

その事に気付かないほどに緊張していたらしい

帰り道

「すごい人だったわね」

「ああ、優しそうな人だったけど、かきといた芯が見えた、なによ

りあの人に見られたとき自分の全てが見透かされそうな気がした」

「その気持ちは分かるわ、それにしても…『天を知る忠臣』ねえ、また凄い評価を受けたじゃない」

「華琳なんて『天下を安んずる者』じゃないか」

「ふふ、それもそうね」

橋玄の評価（天下を安んずる者と天を知る忠臣）（後書き）

たったあれだけの評価で二日かかるという自分の文才の無さに吃驚しています

書くことがないので人物伝を書いてみたり・・・

橋玄：人物評価で有名な許劭に曹操を紹介した人物、演義だと大喬・小喬の父として喬国老として出て劉備と孫尚香の結婚を認めた人ある人を仕官させようとした時に断られて「お前の母を妻にするぞ」と脅したという三国志最大の熟女好き

でも大喬・小喬の父だとすると大喬・小喬は明らかに五十を越えており曹操が小喬を欲したということは曹操も熟女好きといえる
師弟揃って熟女好きとは・・・まさに“類は友を呼ぶ”ですね（笑）

逢紀：袁紹が曹操に敗れた原因？。官渡の敗戦後「『長期戦で曹操が弱ったところを、ふははははは人がゴミのようだと蹂躪したほうがいい、そうすれば三年ほどで勝てるだろう』と田別駕（田豊のこと、別駕は役職）だけが諫止したのに聞かなかったので恥ずかしい」と袁紹が言った時、「あいつは今頃『へっ、俺の言うことを聞かなかったから負けてやんの。バカさまあみやがれ、袁家の妾www』と言っているでしょう」と讒言したお馬鹿さん

でも同じように仲の悪かった審配が讒言させた時はかばった、袁紹が「お前と審配仲悪いやん、なんでかばうん？」

と聞かれたとき「審配と争っているのは私事であり今この場で審配をかばうのは公事であり、それとこれはそんなの関係ねえ、そんなの関係ねえ、はいオッ。ピー」と水着姿で言ったとされる

そうなると田豊を殺させたのは公事なのかとツツコミたくなる不思議

議な人

・ ・ ・ ボケ担当なのかなあ

端午の祭り前編〜桃の香りと白い蓮〜（前書き）

予想より多くなってしまったので今回の話は次回と前編・後半に分けてあります

端午の祭り前編　桃の香りと白い蓮

空 side

明日は端午の節句ということで洛陽は祭り一色に染まっていた

現皇帝である霊帝陛下は祭りを好み、その演出はいつも派手なことで有名だ

その祭りを家族とともに過ごすため三週間ほど前から豪族や商人の子どもは家に帰っていき学院に残っているのは俺と華琳と麗羽と蒼の四人だった

麗羽の親は仕事で忙しく一緒にいられないため

俺と蒼は家族が住んでいる場所が洛陽から遠いため

華琳は親の曹嵩さんと仲が悪いかららしい

例年なら商人の子どもが数人残ったりするのだが今年は見事に皆家に帰っていった

もつとも何？先生はこの事を予想していたらしくある行動をしていた

『橋玄さんの下で一緒に勉強した盧植さんとその教え子呼んで一緒に祭りを楽しむ』

そう聞かされたのが一週間前だった

しかも何？志学院に泊まることが聞かされると俺達は慌てた

まず最初にしたのが盧植さんたちが泊まる部屋の用意だった

本当は宿をとる予定だったのだが今年は洛陽外からの客が多かったらしく宿がとれなかったらしい

流石に俺たちが使っていた部屋を使ってもらうわけにはいかなかった

幸いな事に盧植さんご一行は盧植さんを含めて3人ぐらいしか来ないらしく余っていた物置同然の部屋を片付けた（主に蒼が）

これに二日間かった

皆が帰っていったから一度も掃除しなかったので頻繁に使っていた教室や書庫、厨房以外の場所がとても汚れていたからだ

次に行ったのが学院内の掃除だ

盧植さんご一行が泊まる部屋はもちろんのごとく人手不足でここ最近掃除できていなかった教室、書庫、厨房の場所もしっかりと言葉通り塵一つ残さず掃除をした（主に蒼が）

その他いろいろと他の仕事も多くやることがあった

そしてあまりの疲労と連日の睡眠不足により皆で盧植さんたちを迎えに行く時刻を寝過ごしてしまった

さてどうしようか・・・

華琳 side

遅い、空は何をやってるの

集合時刻になつても来ないなんてやつぱりたたき起こすべきだったかしら

「久しぶりね、道」

盧植さんが何？先生に声を掛ける

「ええ、本当に。後ろの子が教え子？」

何？先生が盧植さんに聞く

「そうよ、白蓮、桃香。挨拶しなさい」

「はい、先生。私の名は公孫贊、字は伯珪というよろしく」

幽州の有力豪族の一つ公孫家の子ね

頭はそんなに悪くなさそうね

・・・しかし容姿といい、喋り方といい

ここまで“普通”という言葉が似合う子も少ないんじゃないかしら

「私の名前は劉備、字は玄德といいます。よろしくお願いします」

劉備ねえ

皇帝と同じ姓を持っているけどその血統は正しいものなのかしら

「ふふ、礼儀正しい子達ね、空、挨拶しなさい」

何？先生が空を呼ぶ・・・が空はいない

何をやっているのよ

私が怒ってもしょうがないのだけどつい苛々してしまう

・・・と、そこに

「先生、空は体調不良らしいです」

私の後ろにいた子が先生に声をかける

・・・まったく何をやっているのよ

「空、もつばれているよ」

蒼が冷静に突っ込む

「なにっ、この俺の完璧な変装が」

私の後ろにいた蝶の仮面を被った空が言う

「あなたはなにをやってるの」

「ひでぶっ」

しまった、つい思いっきり殴ってしまったわ

「いったく、先生え華琳が殴つてきました」

な、なんて奴よ、人のせいにしたわ

「さてつと、遊びはここまでにして・・・俺の名は皇甫嵩、字は義真、気軽にご主人様と呼んでくれ」

[illegible]

蒼が冷静にご主人様と連呼する

「すいません、調子乗ってました」

気付けば空が涙を流しながら土下座をしていた

まあ自業自得ね

空は放っておきましょう

「私の名は曹操孟徳よ、うちの塾長が失礼したわね」

「ええと、皇甫嵩さんは大丈夫なんですか」

劉備がそう聞いてくる

「ええ気にしないで、いつもの事だから」

「華琳、それじゃあ俺が馬鹿みたいじゃないか」

「馬鹿みたいじゃなくて本物の馬鹿でしょ」

「ふん、いいんだ。どうせ俺なんて中盤までそこそこ頑張るけど最後あっけなく死ぬような役なんだ」

空が体操座りで“の”の字を書きながら呟いている

「そ、曹操さん…」

「気にしないで、それよりも蒼自己紹介して」

空にかまっている時間が惜しいので話を先に進める

「僕は逢紀、字は元図とっています」

蒼に自己紹介させてから後悔する

最後に残ったのは・・・

「おゝほっほっほっ、私の名前は名乗らずとも分かるでしょう、四世三公の名門袁家の頭領袁本初ですわ。わざわざ私に会いに来るとは殊勝な心がけですわ。おゝほっほっほっほっ」

「・・・ええと、と、桃香頼む」

「ええ、そのえゝと凄いですね、本初さん」

「あら庶民にも私の名前が分かってしまうとわゝやはり私に流れる高貴な血はごまかすことができませんのね、おゝほっほっほっほっ」

しっかりと名乗ってたわよ、麗羽

「「はあ・・・」」

まずいわね、とても気持ち悪い空気が流れているわ

どうにかしないと・・・

「ところで何？先生と盧植さんは学生時代どんな関係だったのですか」

いつの間にか復活していた空が話題を変える

「そうですね、はっきり言えば犬猿の仲でしたね」

「そうそうお互いに目の敵にして顔を合わせれば喧嘩ばかりしていたわね」

先生たちは微笑んで

「まあ立ち話もなんですから空、行きますよ」

端午の祭り前編〱桃の香りと白い蓮〱（後書き）

とりあえず華琳と麗羽、空と蒼という2ペアを意識して書いていますがこの先どうなるかわかりません

盧植は正史では黄布の乱でバリバリ現役で働きますがこの外史では引退してもらいます、あしからず

端午の祭り後編、天に唄う師、馬鹿を見る弟子、（前書き）

一つ言い訳をさせてください

今日は一睡もしていなかったんです

自分でも気づいたら書きあがってたんです

端午の祭り後編 天に唄う師、馬鹿を見る弟子

華琳 side

一度学院に戻った私たちは盧植さんたちに学院内を案内した後本格的に祭りが始まる夜になるまでいろいろと見てまわることにした

何？先生と盧植さんはなにやら仕事があるらしく私たちだけで見てまわる事になった

「公孫賛は幽州の出身よね、やっぱり洛陽（こくやう）と違うことってあるのかしら？」

表通りを歩きながら私の後ろにいる公孫賛に聞く

「そうだな、洛陽（こくやう）と幽州（むいしゅう）での違いは商売の仕方かな」

「商売？」

蒼が聞いてくる

「ああ幽州（むいしゅう）は行商人のほうが多いかな、あまり店をかまえて商売をする奴はいないな」

「あと人の数だね、こんなに沢山の人を見るのなんて私初めてだよ」

劉備が目をキラキラさせながら周りを見る

「確かに人は多いわね、まあその分犯罪は多いけど」

「やっぱりそういう事をする人はどこにでもいるんだね」

「それは仕方ないさ、桃香。」

洛陽は豪族や大商人の屋敷があるんだそれを狙うような輩は少なからず出てくるだろう。

洛陽の門を守る部尉という仕事があるくらいだからな」

「ええ、不審者や危険人物をいれないようにするのも一つの仕事なんだけどこつという時は…ね」

「まあ、注意しておくべきだな」

「そついえば蒼、空は？」

「ああ空なら・・・」

「おい蒼、これすげえぞ」

そう言いながら空が持ってきたのは竹で作られた水鉄砲だった

「くらえ」

空がそう言いながら水鉄砲で水をかけてくる

蒼はそれをよけると蒼になにかを差し向けた

「ふふ空、君の負けだよ」

「そ、それは……青眼の究極龍！貴様がなぜそれを」

蒼が振り向きざま出したのは空の水鉄砲の三倍はある水鉄砲だった

「ふふ、切り札は取っておくものだよ。さあどうする君の黒の魔術師の水量は2500、俺の青眼の究極龍の水量は4500・・・さあどうする」

「くっ……だが俺は諦めない。俺は俺を信じてくれる店主のためにも
俺は負けるわけにはいかないんだ」

「ならば消えうせるがいい、くらえ滅びの究極爆発光線」

「うわあああああああああああああ……ふっ
覚えておくが、いい人間共。」

お前たちの心に闇がある限り俺は何度でも生き返るのだ。ふははははははははは」

「何をやってるのよ」

「ぐはっ、華琳邪魔をするな。これは男と男の真剣勝負なんだ」

「そうだよ華琳、せっかく歴史に残る決闘をしていたのに」

「周りのことも考えなさい、迷惑になつてるでしょ」

「よし、私も」

「劉備も入ってこないで」

「桃香、入らないほうがいいぞ」

「ぱ、白蓮ちゃん」

「あつ、華琳がいじめた、弱い物いじめはんたい」

「ちょっと別にいじめてなんかいないわよ」

と状況が騒がしくなってきたところで

「あ、あの」

私と同じくらいの年の子が空の前に来る

「これ使ってください」

そして空に手ぬぐいを差し出す

「ああ、ありがとう」

「い、いえ・・・きゃー」

その子は空に渡すと向こうからこっちを見ていた女の子の集団の中に入っていた

空がその集団に向かって手を振る

すると向こうからきゃーという声が沸く

「あいかわらずね」

皮肉交じりに言ってみる

「そんな事言われたって俺にはどうにもできえねよ」

空が両手を挙げる

「華琳さんそんなことよりも早く行きませんか、もう時間ですわよ」

麗羽にそう言われ見てみるとたしかにもう夜になりかけていた

「そうね、すこし急ぐわよ」

祭りの本会場に着いたときには前座がもう始まっていた

どうやら前座は旅芸人による歌らしくときどき音楽が聞こえてくる

歌っているのは三人の少女…姉妹かしら

「すごいね、空」

「ああなんだか引き込まれそうになる歌だな」

蒼と空が感想を言いあっていた

確かにそうだ

とても少女とは思えない声量で聞いている人全員を虜にしていた

三人の少女たちの声はだんだんと小さくなり消えた

「「「ありがとうございます」」」

三人が頭をさげて終わる

「なあ華琳、あれって皇帝陛下じゃないか」

空が指差す方向には靈帝陛下がいた

「しっ、ああいうのは気付いても無視しておくものよ」

そう言っ指差すのを止めさせる

「さあ会場が盛り上がってきた所で今日の祭りで最も注目されている一団の登場です・・・指5」

舞台に出ていたのはそれぞれ違う楽器を持った仮面をつけた五人組

「えっ」

「なにゆえ」

「マジか」

「な、なんですって」

「ねえ、白蓮ちゃんあれって」

「ああ桃香」

「……何？（盧植）先生」「……」

あれは間違いなく盧植さんと何？先生と橋玄さんだ、後の二人は誰かしら

「皆元気かい？」

一番先頭にいる女性が声をかける

「……」「……」「……」「オー……」「……」「……」「……」

「声が小さいねえ、ほんとに元気かい？」

「……」「……」「……」「オー……」「……」「……」「……」

さつきよりも大きな歓声が響く

「いいねいいね、皆元気が良いねえ……じゃあいくよ指5で『学院天国』」

何？先生が琴を弾き始める

その前奏に合わせて歌い始める

ジャジャジャジャー

「ありがとう」

歌い終わると歓声が沸き起こる

その歓声は消えることは無かった

端午の祭り後編〜天に唄う師、馬鹿を見る弟子〜（後書き）

後編です

途中テキストに放りこんだボケが理解できた人が何人いるでしょうか
多分分からない人はいないと思いますがあれです

「ドロー、モンスターカード」

「止めて、。。。のライフはもうゼロよ」

の話です

感想お待ちしています

許劭の評価、治世の能臣、乱世の奸雄と野心なき名將（前書き）

別に荊州に行かなくても・・・と思っていることは秘密です

許劭の評価、治世の能臣、乱世の奸雄と野心なき名将、

空 side

陽が沈み月も南の空に上がりかけた頃

俺達は何？先生の義姉にあたる水鏡女学院院長の司馬徽さんの所にいた

本当は昨日の昼間に着く予定だったのだが山賊に襲われたり、怪しげな壺から出てきて『三つだけ願いを叶えてやろう、フォッフォッフォッフォッ』とかぬかすジジイを県令の所まで連れて行ったりなどで遅れてしまった

ここに来た目的はただ一つ

水鏡女学院で司馬徽のもとで学ぶこと

何？先生は盧植さんと同様に司馬徽さんとも文通していたらしい

その文通の話題の中で俺と華琳の話が出てきて俺たちに興味を持った司馬徽さんが何？先生に貸してくれと頼んだらしい

俺たちは物が

それを承諾した先生に命じられてここにいる

先生がいうには一つの物事、一つの書物でも人によって感じることは違うので時折ほかの人の考えも学ぶべきらしい

・・・先生、俺は男なんですがここにもいいんでしょうか

「これからよろしく願いますね、私の真名は“旗”です」

「俺の真名は空です」

「私の真名は華琳といいます」

流石に義姉妹の契りを交わしているだけあって何？先生や盧植さんと似てゆつたりとした物腰と穏やかなそうな性格の人だ

「まあ緊張せずにお茶でもどうぞ」

と司馬徽さん―いや司馬徽先生と呼ぶべきか―自らお茶を入れてくださった

「（ズズッ）…美味しい」

「…ええ、確かに湯の温度といい、お茶の濃度といい完璧だわ」

「ふふ、『野心無き名将』と『治世の能臣、乱世の奸雄』に褒めていただけるなんて光栄ですね」

「「ブブツ」」

「あら、二人とも汚いですよ」

「ゲホゲホ、何でそれを知ってるんですか」

「尚書令の評価が天下に広がらないと思っているのですか」

『野心無き名将』と『治世の能臣、乱世の奸雄』

それは橋玄さんに行った時につけられた、：まああまり言われたくない評価だ

以下回想

いつものように授業が終わった後帰ろうとすると橋玄さんに呼びかけられた

「少し待ってください、二人に会ってほしい人がいます」

そう言われ待っていると現れたのは一人の老人

「どう思いますか、許劭」

「ふおふおふお、どうじゃろうな」

「この人の名前は許劭、私の友人です」

橋玄さんの友人なら礼儀を欠いていけないな

「皇甫嵩と申します」

「曹操と言います」

「うむ、何処の誰かも分からぬ老人に頭を下げ名を名乗るとは殊勝な心掛けじゃな」

「許劭、どう見ます」

橋玄様が聞くと、許劭さんは華琳を一目見て

「治世の能臣、乱世の奸雄」

と一言呟いた

「標の言ったとおり主に才能がある…がその才能はこれからの人生によって使い方が変わる。

もしこのまま平和な状態が続けば主は能臣としてこの国の歴史に偉大な人物として語り継がれるであろう。

逆にもし何かあった場合…まあ簡単に言えば乱世になれば奸雄として主はこの国を…いやこの大陸の行く末を変えてしまうじやろう」

『治世の能臣、乱世の奸雄』

確かに華琳は本物の天才だ、だがそこまでの才能なのか

俺の知る華琳は常に高みを目指す反面誰よりも寂しがりやな少女だ
はたしてそんな少女が天下統一なんてことが出来るのか

・・・そんな事を思っていると許劭さんがこっちを見ていることに
気付いた

許劭さんはゆつくりと口を開き

「皇甫嵩は儒教は知っておるか」

質問してきた

「まあ。漢帝国の基本ですから」

「では入りては相、出でては将という儒将の理念を知っておるじゃろう、主はそれじゃ」

「・・・よく意味が分からないのですが」

「主は曹操と似とるが少し違う、曹操はこれからの世の中の動きにより自らが進むべき道が変わるが主が歩むべき道は何一つ変わることはない。

ただひたすら漢帝国・・・いや皇帝に仕えある時は軍を率いて、ある時は竹簡を片手に持ちながら・・・まさに儒将として活躍しその人生を終えるじゃろう。

主はまさに『野心無き名将』じゃな」

『野心無き名将』・・・か

「どうしたの？空」

いつもとは違う俺の様子に違和感を覚えたのか華琳が聞いてくる

「・・・いや評価っていうのはその人が今まで歩んできた生き方に対して他の人が賞賛したり、非難したりする物だと思っていね、まだなんでもない学生に立派な評価をつけるのはちょっとおかしいと思う

んだ。

それに、評価されてその評価に縛られて自由に行動できなくなったら本末転倒じゃないか、・・・すみません許劭さん折角評価していただいたのに」

そう謝る

「ふおおふおおふおお、あくまで己の信ずる道を生きるか、予想通り面白い奴じゃ。

将来が楽しみじゃのう」

そう言つて許劭さんは帰っていった

後で分かった事だが許劭さんは尚書令（皇帝の秘書官長）だったらしくこの話が広まっていきこれ以降俺と華琳は許劭さんに評価された“野心無き名将”と“治世の能臣、乱世の奸雄”が広まっていって

以上回想

「・・・できればそれは忘れていただきたいと思うのですが」

「無理です、というか嫌です」

「即答ですか」

・・・前言撤回、何？先生とは違って物凄いお茶目な人だ

何故だろう、これからの生活で物凄く振り回されそうな気がする

そんな事を思っていると

学院の門を叩く音が聞こえてきた

それも普通の遠慮がちなものではなく・・・そう何か緊急事態が起きたかのようなどこか焦りを生み出させるな叩き方だ

「失礼、ちよつと様子を見てきます」

その叩き方に違和感を覚えたのか司馬徽先生が様子を見に行つた

「何かあつたのかなあ」

「さあ分からないけど・・・」

「…けど？」

「いやな予感がするわ」

そしてその予感は的中する

「ちよつと何ですか」

「華琳、華琳はいませんか」

転がるように入ってきたのは華琳と同じ金色の髪を持った女の子だった

「秋蘭じゃないの」

どうやら華琳の知り合いらしい

服がところどころ擦り切れている所からよほど急いできたらしい

「華琳ッ、曹騰様が」

「ッ！、お婆様がどうしたの」

華琳の祖母にあたる曹騰さんの話題になった途端華琳の態度が変わった

「まあ、落ち着け華琳、首をつかまれては話すことが出来ない」

…あの子顔色がマジで真っ青だけど大丈夫だろうか

「げほげほっ、華琳慌てずに聞いて欲しい」

そんな前置きまでされた話の内容は

「・・・曹騰様が死んだ」

予想をはるかにこえる物だった

許劭の評価↓治世の能臣、乱世の奸雄と野心なき名将↓（後書き）

もう二話水鏡女学院の話の予定です

この時点では華琳様は霸王ではありません
ただのSな少女です

Sな少女が霸王に変わる瞬間・・・みたいなのが書きたいな。書け
たらいいな

橋玄（標）↓生徒たちがこれからの人生を決めるとき少しでもその
標になればいいなという希望から

何？（道） 道＋標〓道標

盧植（識） 標＋識〓標識

司馬徽（旗） 旗＋標〓旗標

特に意味はありません、三人とも脇役なので（笑）

離れの義兄、空のロリコン説浮上（前書き）

始めに言っておきます

flowerはロリコンではありません

今まで出したキャラ（12人）の内半分（6人）がペツタンコなのは気のせいです

正確にはロリは5人ですが胸が無いというカテゴリーで分けると華り（スパッ）・・・いえ、何でもありません5人です

雛里の義兄／空のロリコン説浮上

空 side

半ば強制的に塾長になってから二ヶ月が経った

仕事の中には明らかに生徒が見てはいけないものが混じっていたり
とろろんな意味で大変だったが人間というのは都合よく出来ていて
今ではこの生活が当たり前になっている

先生の部屋に頼まれていた資料を置いておく

授業が終わって今からは自由時間なのだが生憎明日までに役人に出
さなければならぬものがあるので俺に自由時間はないのだが俺は
朱里の部屋へと向かっていた

部屋からは賑やかな声が聞こえてくる

「朱里、空だけど入っていいか？」

「そ、空さん！入っていいですよ」

良かった、ここで駄目と言われた泣く所だった

「朱里ちゃん、駄目だった」

「大丈夫だって、雛里ちゃん」

・・・グスッ

「お待たせしました〜・・・ってはわわ、なんで泣いているんですか」

「何でもない、ただ世間の辛さを噛みしめているだけだ」

「わわわ、それはそれでおかしいと思うんだけど」

「朱里じゃないほうの朱李よ、そこは気にするでない」

「…空」

「咲里、お前はすぐ人の後ろに立つな。」

ああもう目的が人物と話ができん

「朱蓮、前頼んでいたやつできたか？」

頼んだのは少々難解な計算だが朱蓮ならできているだろう

「ほわわ？あつごめんなさい、忘れてました」

そう言つて朱蓮は真つ白な竹簡を差し出してきた

しまった、朱蓮はこういう性格だった

「・・・ああうん、いいよ。・・・朱里、俺の論語写し終わったか？」

論語は読む人によって解釈が所々変わつてくるらしく何？先生の解釈が見たいと言つてきたので以前貸したやつだ

「あつ、はい。ありがとうございました」

朱里が机の上にある竹簡を取りに行こうとして・・・こけた

「はわわ！」

幸いなことに倒れた先は寝台で怪我は無かったが倒れたときに足で机を蹴つたらしく机のうえにあった竹簡が床に落ちてさらにその上に硯が・・・

「はわわ、ご、ごめんなしゃーい」

朱里が涙目で謝ってくる

「・・・ははは、いやいいよ。・・・はあ」

流石に凹む

「なあ地味しゅり」

「わわわ、地味朱李っていうな」

「なにか言ったか、しょかつきん？」

「わわわ、諸葛均って言うな」

「俺は朱蓮に聞いたんだがな・・朱李の自意識過剰」

「わわわ、むかつく奴」

ああなんか落ち着くわ

「…空、しゅりをいじめちゃだめ」

咲里後ろから声をかけるのは止めよう、怖いから

「咲里、その言い方だとそれは孔明のほうの朱里を言ってるだろう」

「…何のことか分からない」

咲里さん。視線が泳いでますよ

「そ、空さん、あの、その…勉強を教えてほしいんですけど」

別に勉強を教えるのは構わないんだが・・

「すまん雛里。これから仕事があるんだ」

顔の前で手を合わせ軽く謝る

「そうですか…じゃあそのまた今度の機会に・・・」

「ああいいよ、時間があれば」

そう言つて部屋を出る

さあ徹夜の始まりだ

雛里 side

時間は子の刻（午前0～2時）皆はもう寝ている時間だけど空さんは起きているはず

さつき持ってた竹簡の量からして・・・きっと・・・多分

「空さん…居ますか」

私は扉越しに声を掛ける

「…ん、雛里か？開いてるよ」

部屋の中から返事が変えてきたから中に入ります

あれ？空さんの姿が見えない

もしかしてさっきの声は幽霊？・・・あわわわわわわわわわわわわ

「・・・雛里どうした？」

気付けば空さんが私の目の前にいます

「...はわわ？」

「それは朱里だ」

まさかの即答でした

あまりの驚きで朱里ちゃんの口癖になっちゃった

「空さんどこにいたんですか？」

「机の下だけど・・・」

「なんでそんなところにいるんですか」

「逆ギレだよねそれ、俺が悪いのか...悪いんですか...なにそれ怖い」

「わわわ」

「それも朱李だ」

・・・うん、お遊びはここまでにしよう

空 side

「で、用件は？」

さっきのやり取りでかなりの氣力を失った

雛里ってこんな子だったかなー？

「そ、それは…ですね・・・そ、そによ」

・・・うん、いつもの雛里だ

「お茶でも飲む？」

「・・・いただきみやす」

「囃んでるよ」

「ほわ「言わせねえよ」「・・・むっ」

わざとなのか、わざとやっているのか

雛里 side

お茶を一口啜る

ううやっぱり恥ずかしいよ

でも今日言うつて決めたんだ

「空さん…あのですね・・・その…これから空さんのことをお兄ちゃんって呼んでもいいですか」

私は小さいころお兄ちゃんっていうのに憧れていた…ううん今でもずっと憧れてる

でも女の子じゃない水鏡女学院にいるからそれは無理だと思っていた

でも空さんに会ったときに私の理想のお兄ちゃん像にぴったり合ってた

強くて優しくとつても明るい

だからお兄ちゃんって呼んで欲しかった

空さんは固まっている

やっぱり急すぎたかな？

「・・・ダメですか」

答えは分かっているけど聞いてみる

「・・・うん、別にいいよ」

「そうですか：Oh，Really？」

「時空を超越するな」

「大丈夫です、外史ですから」

「止めろ、いろいろ危ない」

翌日

今日は私と朱李ちゃんが朝ごはんの当番

いつもより一時間ぐらい早く起きて皆の分を作る

皆の分の朝ごはんを作り終わるころには皆起きてご飯を食べに来る

「雛里ちゃんおはよう」

「朱里ちゃんおはよう、空さんは？」

「…空なら…もうすぐ…来る」

「はわわ元直ちゃん、おはよう」

「…おはよう」

朝の挨拶をしていると水鏡先生がやってきました

「皆さん、おはようございます」

「」「」「水鏡先生おはようございます」「」「」

「今日の当番は雛里と朱李？でしたね」

「わわわ、先生“？”ってなんですか」

「ええーと、誰でしたっけ」

「朱李です、均のほうの朱李です」

「・・・ああ朱李ですか」

「なんですか今の間は」

「…好々」

こないいつものやり取りをしているとお兄ちゃんが来ました

「ふわぁ皆おはよう」

「あつ、お兄ちゃんおはようございます」

「ああ、おはよう雛里」

スツと食堂が静まります

「ほわわ、雛里ちゃんお兄ちゃんってどういふ事」

「わわわ、お前何やってんだよ」

「ほわわ、お兄ちゃん？」

「……………?」

「お兄ちゃんですか、好々」

この後お兄ちゃんは幼女好きという噂が荊州中に流れました、あわわ

離れの義兄、空のロリコン説浮上（後書き）

水鏡女学院編はここで終わりです

本当はもう2、3話書きたかったのですがネタは「……ゴホン、話を進めたいので泣く泣くカットしました」

まさに泣いて馬糞を切るですね……。ちがいますか、そうですか

橋玄の評価ゝ硝子は美しく儂いゝ（前書き）

ごめんなさい洛陽に戻れませんでした

前話の違和感の正体は

「空って水鏡女学院の塾長だったわけ？何？志学院に塾長だけど・
・」という友人Aからの報告で判明しました

そういうわけで空が塾長になった時のお話です

時系列的には伍話と陸話の間です

橋玄の評価　硝子は美しく儂い

空 side

洛陽と違って木々が多いからか

鳥達のさえずりがよく聞こえる

俺には鳥の言葉なんて分からないが聞いている感じには俺たちがいつもしている挨拶や会話をしているように感じる

そんなさえずりを聞きながら俺は眼を覚ます

いつもと同じように寝具をたたみ

いつもと同じように体を軽くほぐし

いつもと同じように服を着替え

いつもと同じように部屋の扉を開ける

そんないつもと同じような日常

それがどれだけ得がたい物だったのか

俺は今更ながら知った

いつもと同じような日常で唯一いつもと違う風景

扉を開けると目に入ってくるのは目、目、目、目、目……

いくつもの目が俺を捕らえる

その目から読み取れるのは好奇や興味、そして恐怖

しかし俺はそれを気にせずにその場を去る

その足は自然とこの学院の教師の部屋へと向かっていた

> p f <

旗 s i d e

「空君、どうしました」

つい先程道のところから借りてきた空君が私の部屋に来たと思えば急に部屋の隅で体育座りをし始めました

なんかとても近寄りがたい雰囲気です

しかし私は先生

生徒が悩んでいるのならばそれを解決するのが使命

意を決して声を掛けます

「何でもありません、水鏡女学院の皆が俺のことをいつもじっと見ていて話しかけようとすると皆涙を流しながら逃げていくことなん

て靈帝陛下の治世ぐらい気にしてませんから気にしないでください、あと俺のことは呼び捨てで結構です」

なるほどこの子達は女の子ばかりで異性と触れ合った経験が皆無の子が多いですからね

「男性の空君が気になるけど話しかけるのは怖いとっている子がほとんどなのでしょう。これは盲点でした、何とかしなければなりません・・・あとその言葉は場所によっては打ち首ものですよ」

「大丈夫です、俺のことなんて誰も気にしませんから」

そんなにきつぱりと言われると返す言葉がありませんね

やはり見知らぬ場所に一人で居るといのが原因でしょう

「頭は良くても中身はまだまだ子どものようですね」

「…どうせ俺は子どもですよーだ」

やれやれこれが先日お婆様が死んで錯乱状態だった華琳さんを落착かせた人物とは到底思えませんね

『あなたには家族を失った悲しみなど分らない』と言った華琳さんに『俺が七歳の時、俺の家族は伯父以外皆俺の目の前で自殺したさ』と言った時に見せたあの表情は生きる事を諦めた人たちと同じものでした

こうして空君と話していると空君の心の中には二人の女性との繋がりが見えます

おそらく空君が今こうして生きていられるのはその繋がりが心の中にあるからでしょう

逆に言えばその繋がりが切れたとき空君はきつと自らの意思で命を絶つでしょう

例えるなら硝子

慎重に扱わなければ一瞬で砕け散ってしまう危うさを持っている、しかしそれでいて人を引き付ける不思議な魅力を持っている

道が空君には気をつけて欲しいと言っていたのはきつとこういうことでしょう

ならば私が先生として空君になすべき事はただ一つ

空君が生きていたいと思えるような環境を整えること

一瞬で砕け散ってしまうのなら砕け散る前に拾ってしまえばいいのです

そのためにはまず・・・

空 side

「今からは塾長を決めたいと思います」

流石にいつまでもいじけているわけにはいかないので今こうして授業を受けているわけだけど

俺の席は一列目の左から三番目、一列目の他の席は先生がいつも教材云々を置くので誰もいない

つまり水鏡女学院の生徒はみんな俺よりも後ろにいるということだ

果たしてこれが何を意味するか分かる人いるだろうか？

簡単に言ってしまうえば後ろからもの凄い視線を受けているんだ

そして俺が少しでも動くと後ろの生徒が皆動揺するんだ

この状態で集中などできるはずがない、というよりまだ塾長決まっていなかったんだ

まあ大方諸葛三姉妹か鳳統か徐庶だろうな

旗 side

今朝の決意を実行するにはまず人間関係の改善からでしょう

幸いなことに朱里たちも別に空君のことを嫌っているわけでもなく空君も人当たりがよく話術も上手いですから空君を塾長にして少しでも話しやすい環境を作っていけば朱里たちも慣れていくでしょう

しかし私が水鏡女学院に来て日が浅い空君を指名するのは反発があるに決まっています

もちろんこれも対策は考えてあります

「いろいろと考えましたが皆さんでこの人にやってほしいなという人の名前を書いて私に渡してください」

いわゆる選挙ですね

せーんきよ ♪ せんきよっ ♪ 明るいせんきよ ♪

そつえば流。Pというバンドがアノ曲をカバーして某動画投稿サイトに投稿したけど批判が多くて消したという噂が有りましたが実際はどうだったんでしょうか

そんなことはさておき空君が水鏡女学院に来たときに塾長だったこ

とは言っておきましたのできつと皆空君を選んでくれるはずで

私は名前の書かれた竹簡を見ていきます

朱里（諸葛亮） 12票

雛里（鳳統） 10票

朱蓮（諸葛瑾） 9票

咲里（徐庶） 6票

空（皇甫嵩） 2票

朱李（諸葛均） 1票

朱李って誰でしたっけ？…ああ諸葛均ですか

…べ、別に忘れてたわけじゃないからね／／／

「……というわけで空君に決まりました」

嘘ですけど

「なぜですか」

今決めたからです

「分かりませんが皆が空君を選んだのですから諦めてください」

気にしないでください

今時の選挙だって結果の改変ぐらい普通にや…あなたたち何をするのですか、放してください。ああ

（司馬徽先生は早退しました）

「俺水鏡女学院（ミツキョウ）に来たばかりなのに」

「空おじちゃん泣かないで」

「うう、ありがとう璃々ちゃん…あとおじちゃん（おじちゃん）は止めてね、俺まだ十七だから」

橋玄の評価／硝子は美しく儂い／（後書き）

本当は華琳が錯乱してそれを空が必死に宥めるという話にしようと思いましたが上手く纏められなかったので断念しました

中盤にちよつとシリアスになってしまいました主人公は多少闇を抱えていたほうが物語は面白いとflowerは思うのです

作者のアイドルである璃々は強引に水鏡女学院の生徒にしました裏設定で夫が死んでしまつて璃々を預ける人がいなくなつてしまつた紫苑が昔ながらの顔見知りである旗に預け、なんやかんやで空が面倒を見ているというのがあります

• やっぱり小さな子どもをつれて戦場に行く親はいないと思うので・

感想お待ちしております

覇王の儀式、優しき少女は覇王へと、（前書き）

それは全てを壊し、新たな理を作る者

霸王の儀式く優しき少女は霸王へとく

空 side

二年間水鏡女学院で勉強し何？志学院に戻ってから数日華琳が来た
華琳は今まで北部尉として働いたらしくその功績により陳留太守に
任命されたいらしい

もつとも俺から見ればただの厄介払いだと思うが

華琳の厳正な処分を疎ましく思った奴らが地方に飛ばしたんだろう

そんな事を思っていると華琳から屋上に来いと言われた

屋上に行くと華琳が座っていた

俺はその横に座る

「ひさしぶりだな、華琳」

「ええひさしぶりね、空」

それだけ言つと俺達は一言も喋らなかつた

どれくらい経つただろうか華琳が独り言のように俺に語りかけてきた

「北部尉として働いて分かつた事がある、・・・それはこの国は腐つていているという事よ

官僚の腐敗、皇帝の悪政、民の困窮

華琳の語るそれはとても生々しかった

「誰かがこの国を変えなければならぬ、生半可なものでなくこの国を壊すほどの劇的な改革で」

華琳は俺の腕をきゅつと掴む

「ただそれは多くの人に恨まれるでしょう」

華琳が選んだ道はとても厳しい茨の道、だがそれを華琳は選んだ

だつたら俺は見送つてやらなければならない

「そうか」

ただ一言、それだけでいい

それ以上の言葉は華琳の決意を揺るがしてしまう

やがて立ち上がり無言で去っていく華琳

『治世の能臣、乱世の奸雄』

許劭さんが華琳につけた評価

聞いたときはありえないと思った

でも現段階ではそれは当たろうとしている

となれば俺への予言も・・・

そんなことを思いながら見上げた空は星明り一つも無い真っ暗なものであった

数日後

「華琳様、準備が出来ました」

「ええありがとうございます、春「蘭」

今日、華琳たちは陳留に出発する

華琳は馬に乗り出発の準備を整えさせると俺のほうに来て

「空、私と共に来なさい」

唐突に勧誘してきた

今日まで一切そんな素振りをも見せなかったので少し驚くが

「俺が付いていったところで何もできねえよ」

俺はそれを断る

「あら、あなたの能力なら私の軍でも活躍できると思うのだけど」

珍しいな、華琳が二度聞いてくるなんて

「だからいつも言ってるだろう、俺は凡人だ」

「貴様、華琳様のお誘いを断る気か」

黒髪の女の子が殺気を俺に向けて放ってくる

ああ怖い、怖い

「そのつもりで言っただけだ」

「貴様ッ！」

その女の子が俺に切りかかるうとする・・・が

「春蘭、落ち着きなさい」

華琳が手で抑える

「空、理由を聞かせてくれるかしら」

そしてそのまま俺に聞いてくる

「華琳、俺はまだ何をすべきか分からないんだよ」

あの日華琳が俺に決意を話してから俺には何ができるのか、何をすべきなのか

ただその事だけをひたすら考えていた

正直何も考えつかなかった

このまま華琳に付いていても俺は何も出来ないだろう

「ならば私があなたのなすべき事を与えてあげましょう」

「俺はそれが嫌だ、俺は自らの手で道を拓きその道を歩んで生きた
い」

俺は俺らしく生きていきたい

別に華琳について行ってたら自分らしく生きられないというわけじ
やない

でも華琳についていけば俺は間違いなく華琳に頼ってしまうだろう

希望は光 絶望は糧

思い出は盾 笑顔は証

涙は印 痛みは標

どんな苦しみも悲しみも俺は全て受け止めて生きていきたい

だからこそ俺は華琳を拒む

「…そう」

そついう華琳の顔は俺の知っている優しい少女の顔だった

冗談だ、と言ってしまっいそつな自分をぐつと抑える

そつ…これは儀式だ

寂しがりやな女の子華琳が誰にも理解できない孤高の霸王曹孟徳となる為の儀式だ

だからこそ俺が邪魔してはならない

「いいわ空、私はここで宣言するわ。空あなたを手に入れてみせる」

その顔はまさしく王の顔

華琳はこれから大空へと羽ばたいていくだろう

きつと俺の手が届かないところまで

友と友

今までの俺たちの関係

王と民

これからの俺たちの関係

もう二度と同じ位置には立てないだろう

だがそれでも俺は後悔しない

「それは楽しみだ、じゃあな華琳」

「ええ、さよなら空」

見上げた空は憎らしいほどの蒼天だった

霸王の儀式／優しき少女は霸王へと（後書き）

ようやく書けたーーーーー

今話をもつて華琳様は霸王になります

今回の話は最初から予定しており原作の「王になんてなりたくなかった（間違ってたらごめんなさい）」というセリフから思いつきました

ぶっちゃけこの話を書きたいがために私塾時代編を書いたということころもあります

心優しき少女は残酷な現実を見て誰よりも傷つく霸王になることを選んだ

解説がつくとすればそんなところでしょうか？

次回は桂花の話

ツンじゃない桂花の予定です

あまりデレません、デレるようになった理由を書いて終わると思います

感想お待ちしています

・・・終わりたかったけど緊急アンケートーどどんぱふぱふ

実は今プロットの見直しをしているのですが（調子に乗って離里告白イベントを書いたため）一つ質問

―――外道な一刀って殺してもok？

1、ダメ、絶対

2、外道なら良し

3、そもそも外道にするな

4、いつそ出さない

結構迷ってるんですよ、これ

原作アンチはしたくないけど話の設定上しざるを得ないんで
回答よろしくお願いします

王佐の才との邂逅、自らを偽る桂の花（前書き）

アンケートの回答ありがとうございます

今回はアンケートの結果は参考意見という扱いにさせていただくとにします

現時点で決まっているのは

- 1、黄巾の乱は原作通り+所々設定を変える
 - 2、空は独自勢力or魏✓
 - 3、ヒロインは3、4名（作者のアイドル璃々を除く）
 - 4、オリキャラが飽和するかもしれない
 - 5、やっぱり張任が一番好きだ
- となっております

王佐の才との邂逅、自らを偽る桂の花

空 side

「ありがとうございました」

荷物をまとめて橋玄さんの屋敷を出る

華琳が陳留に行ってから俺の日常はみじんも変わらない

「ああ空君、忘れてました明日転校生が来ますよ」

「こつちですか、」

「何？先生の所にですか？誰が来るんですか」

「ふふ…『王佐の才』ですよ」

・・・訳が分かん

翌日

橋玄さんの言った通り転校生が来た…来たんだが

「ちょっと何見てんの、馬鹿が移るでしょう」

「なっ、馬鹿ですと。この袁家出身である私が馬鹿とはどういうことですよ」

「どうもこつも言葉通りじゃない、着飾って気持ち悪い」

「き、気持ち悪い…そんなこの私が」

「麗羽大丈夫、ちょっと苟？さん言いすぎだよ」

「近寄らないで妊娠しちゃうわ。なによ、逢紀って掃除でもするの」

「……………（シクシク）」

「…うん、ひどいね」

すつごく嫌々ながらの自己紹介を終え授業が終わるまではよかった

一言も発さずに黙々と授業を受けるその姿はどこか華琳と似ていた

橋玄さんが王佐の才って評したってことは苟？も華琳と同じ英雄の才があるという事だろう

…全く不思議なもんだ、凡人の俺の周りには英雄が多くいる

俺は神なんてもの信じないがもしいるとしたら俺は相当嫌われているに違いない

・・・それにしても

「男なのに泣くなんて気持ち悪いわね、なにアレなの？体は男だけと精神は女って奴？もげればいいのに」

・・・うん、王佐の才の無駄遣いが甚だしいな

桂花 side

今の私の気分は最低だった

名門袁家の跡継ぎ袁紹があそこまで愚かだったこともその理由だがもっとも大きな理由は・・・

「なあ荀？、なんでここに來たんだ？」

この塾長皇甫嵩だった

塾内を案内してもらっているのだがひっきりなしに私に話しかけてくる

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

はつきり言えばうつとしいのだが無視したほうが賢明だろう

「はい、ここが苟？の部屋。俺の部屋はこっから右に五つ目の部屋だからなんかあったら呼んでくれ」

「ふん、アンタみたいな薄汚い醜男に用なんてないわ」

言い方にイラつときてつい大きな声が出てしまう

「ふーん、まあいいや。おやすみ」

なによ、あの目

何でも知つてると言いたげな目は

あんたに私の事が分かるわけがないじゃない

本当に腹立つわ

私は扉を思いつきり閉めた

空 side

荀？が来てから数日たった

今日は休みだが残念な事に塾長にはそれを有効活用する時間は無く
街に買い物に出かけている

街はいつものように活気沸いていた

「おばちゃん、筆ちょうだい」

文房具屋のおばちゃんに声を掛ける

「はいよ、幾つだい？」

「とりあえず十本、あと硯を二つ」

「ほいよ、それにしても大変だねえ」

「いえいえそうでもないですよ。書物を読むのは楽しいですよ…儒
教は苦手ですけど」

「はっはっはつまあ頑張ってくれよ。将来の三公」

おばちゃんが俺の背をドンと強く叩く

「痛ッ…期待しすぎですよ」

「そうかい？華琳ちゃんだって陳留の太守になったんだし空ももう
じき来るんじゃないの」

「華琳の場合は特別ですよ、本来俺らみたいな学生はなんかの試験に受かってようやく官吏になれるんですから」

「ふーん、まあいいさ頑張ってくれよ。ほいこれは餞別」

おばちゃんが桃をくれる

「ありがとうございます、じゃあさようなら」

「うん、やっぱり桃は甘いな」

右手で桃を持ち左手には麻の袋を持って洛陽の中心を歩く

このまますぐに学院に戻るのもつまらないな・・・少し回るか

洛陽は二年前と変わらずでばーとしてると人とぶつかってしまっ

「何ぶつかつてのよ、この不能野郎」

なにやら聞き覚えのある声が聞こえていた

・・・おいおい外で問題起こすのは勘弁してくれよ

俺の聞き違いである事を祈りつつ声の聞こえたほうに急ぐ

そこには予想してた通り苟？と見るからにガラの悪い男がいた

「ああガキが調子のんじゃねえよ」

男が苟？にガンをとばす

「…ふん、そんなことしかいえないなんてからっぽな頭ね」

「・・・デメエ」

「きゃっ」

男が苟？を押し飛ばす

「へへ、こんなんじゃすまねえぞ」

「…やれるものならやってみなさいよ」

苟？が立ち上がって食って掛かる

正直苟？のせいで蒼とかが精神崩壊を起こしているのでここで苟？がボコボコになるのを見ててもいいんだがあんなに足が震えている少女を見ているのは俺の性に合わないんで・・・

「はいはい、ちょっと通りますよ」

男と苟？の間を通る振りして男を思いつきり殴り飛ばす

「デメエ何しやがんだ」

「いやいやお前こそ何してんの？この子何？志学院の生徒だよ」

「そんなことあ知った事か」

「へえじゃあ見過ごすわけには行かないね」

「へっやれるモンならやって見やがれ…よッ」

男がふいに殴りかかってくるが華琳の斬撃に比べれば止まって見える
右に一步ずれて男の顎を横から殴りつける

「ぐはっ」

ちよつと強く殴りすぎたかな？

「どうするまだやる？」

「くそ、覚えてやがれ」

さっきの一発で実力の差を知ったのだろつか男は捨て台詞を吐くと
逃げて行った

「…さて、苟？大丈夫か」

「…一つ聞くわ、なんで助けに来たの」

そう苟？が聞くのは当たり前か…学院の皆が苟？とは一線を引いているのは周知の事実だしな

まあそれと同じで俺が苟？を助けたのも当たり前なんだけどね

「ああ…俺の信条で何？志学院の生徒なら誰であろうと守ると決めてるんでね」

俺が俺であるために誰かのためでなく俺のために決めた規則だ

偽善

そんなことは分かっている

…俺はどこか華琳に憧れているのかもしれないな

「…ふん、ふん。アンタが来なくても私だけで十分だったわよ…
…でも感謝するわ…あ、ありがとう」

そつぽを向いて礼を言ってくる苟？

「そいつはどうも、俺は先に帰るわ」

袋の中を 見ると幸いなことに筆は折れてなかった

「ちょっと待って」

荀？が俺を呼び止める

「なに？」

首だけ後ろを向けて聞く

「・・・桂花よ」

「いや何が？」

俺が聞き直すと荀？は心底嫌そうに

「桂花、私の真名よ」

真名を預けてきた

「・・・俺の真名は空だ、よろしくな桂花」

「ふん、勘違いしないでよね。別に真名を呼んで良いつて言ったわけじゃないんだからね、空」

「はいはい、じゃあな」

語り side

空と桂花が真名を交換したあと二人は何ごともなかったかのように
過ごし夜になる

時刻は子の刻（午前0～2時の間）あたりだろうか

空以外の生徒は皆眠りにつき空も塾長としての仕事を終え最後に学
院内の見回りをして眠る予定であった

「あれ、書庫に明かりがついている」

蠟が貴重なこの時代に夜遅くまで起きている者はほとんど皆無であ
った

それは商人や漢帝国から支援を受けている何？志学院も例外でなく
空も自腹で蠟を買いこの時間まで起きている

「・・・消し忘れかな」

多分誰かが使ったあと火を消し忘れたのだろう

そう思い扉を開ける

扉の向こうには・・・

「・・・ッ！誰よ」

・・・桂花がいた

「どうした？」

「うるさいわね、見てわかんないの？相変らずからっぱの頭ね」

桂花はいつものように毒舌を吐く

「えーと…断食？」

「アンタの思考回路が気になるわ・・・これよ」

桂花が出したのは老子だった

「老子…か、自主勉か？」

「そうよ…何か文句でもある？」

「別に無いけど一人で寂しくないか？」

「そんなこと思っような性格に見える？」

「ふーん」

そう言いながら空は桂花の隣に座る

「ちょっと何してんのよ」

桂花は空の行動を理解できずに噛み付くように聞いてくる

「俺も勉強しようと思ったただけだ、気にするな」

空はそう言いながら手元にあつた孫子を読み始める

「……まあいいわ、私は寝るわ」

桂花は荷物を纏めて立ち上がろうとした瞬間・・・倒れた

桂花 side

「空…ホントはこんなこととして欲しくないんだからね」

私は空に釘を刺す

「はいはい」

空は私の言葉を聞き流す

私の目には空の顔と天井しか写らない

・・・そう、私は空に膝枕をされているのだ

いつも食事や睡眠時間を削って勉強していたのが悪かった

いつかは倒れると思っていただけまさかこんな時に倒れるなんて

「それにしても苟？は偉いな、こんな時間まで起きて勉強してるなんて」

空が孫子を読みながら私に聞いてくる

「ふん、いつもの事よ」

私の返事が悪かったのか、空はそれから黙って読みはじめた

沈黙の時間が流れる

空の膝は鍛えられているのか固く、そしてどこか柔らかかった

・・・いつ以来だろう、誰かに膝枕されるのは

そんなことを考えていると昼のことが思い出されてきた

“俺の信条で何？志学院の生徒なら誰であろうと守ると決めてるんでね”

今までも私を助けてくれた人はいた

でもそれは何かしらの報酬を期待してのものだった

今回のように何の見返りを求めず善意で助けてくれたのは初めてだった

…空はどう思うのかな

「空…実は私荀子の末裔なのよ」

気がつけば声に出していた

「ふーん、それで」

「それでって？」

予想外の答えにもう一度聞いてしまう

「別に荀子の末裔だからって桂花がどうこうなるなんてことはないだろう？」

「いや、そうだけど・・・」

「桂花は桂花。俺が今膝枕している桂花は“荀？”じゃなくて“桂花”だということそれだけだ」

…目の奥が熱くなるのが分かった

今まで親でさえ荀子の末裔ということを見て“私”を見てくれる人は居なかった

私はそれが嫌だった

だからわざと毒舌を吐いて他人を近づけないようにしていた

近くに来た人ほど私を荀子の末裔としか見ていなかったから

気が付くと空が私の頭を撫でていた

私は涙を見られないように顔を背ける

空は独り言のように続ける

「甘えたければ甘えればいいよ、俺は“桂花”を見ているから」

ずっと誰かに甘えたかった、ずっと誰かに“私”を見てもらいたかった

限界だった

今まで我慢していた分が一気に溢れていくように私は声を出して泣いていた

空はその間ずっと私の頭を撫で続けていた

王佐の才との邂逅／自らを偽る桂の花（後書き）

血統を重んじるあの時代ならこれぐらいのことはあるかなーと思って書きました

喧嘩と膝枕のくだりはご都合主義で書きましたが勘弁してくださいモデルは麗羽でしたがどうだったでしょうか

ある少女は袁家のプレシャーから逃れるために自らを飾り、ある少女は荀家のプレシャーから逃れるために他人を近づけないようにした、救われた少女には甘えられる人がいた

前話のように解説をつけるならこんなものじゃないでしょうか

感想お待ちしています

p,s どうでもいいことなのですが原作キャラの死って結構抵抗あるものですか？

某掲示板の某SSで恋姫の原作キャラが死ぬたびに結構批判を浴びてたのが記憶にあるんですが……

三人衆との邂逅『空』を変えるのは風と星と……（前書き）

どうも一昨日の鳳徳別伝のほうで友人内での人気が高いという驚愕の事実に驚いているflowerです

まあそんなことは置いといて本編へGO！

三人衆との邂逅『空』を変えるのは風と星と…』

??? side

私達は今洛陽にいる

今まで一人で旅をしていたのだがつい先日賊に襲われている風と稟を助け、意気投合した私達はそのまま一緒に旅をすることになった。

今は風が風の噂で聞いた洛陽にいるらしい『野心無き名将』とやらに会いたいと言いここ洛陽にいる

正直なところ風には悪いが私は期待していない

尚書令許劭が評価したとされる『野心無き名将』

それと対になって話される『治世の能臣、乱世の奸雄』曹操は北部慰としての厳格な処罰で有名となり今は陳留太守になっていることは有名だが『野心無き名将』と評価されたらしい皇甫嵩は何？志学院にいる、ということしか分かっていない

はつきり言ってそんな名前だけの人物など逢う意味は無い気がするのだが

そんなことを一人考えながら歩いているとなにやら騒がしい事に気づく

そこに行ってみると・・・

「おら、動くんじゃないね」

そこにはか弱い少女を人質に金を要求している山賊のような風体の男がいた

どこにいてもこういう輩はいるものだど取り押さえようとするが何もせずただそれを見ているだけの男に気づく

「風、稟おかしいと思わないか」

「この状況で見に行くわけでもどこかに行くわけでもなくあのようになただ見ているだけとは・・・」

「そうですね、風が聞いてくるのですよ」

そついうと風がスタスタと男の方に歩いてしまう

大丈夫だと思いがもし風になにかあつてはまずいと私たちは慌ててあとを追った

空 s i d e

「もしもし、そこのお兄さん」

声に気づき下を見ると一人の少女が居た

「俺に何か？」

そう聞くとその少女は

「…ぐう……」

急にタヌキ寝入りを始めた

「「寝るな」」

「おおう」

・・・何故だろう、以前に同じ事をされた気がする
って今誰かとかぶらなかったか？

そう思い前を見ると眼鏡をかけた一人の少女がいた

「…失礼ですがこのお嬢さんのお知り合いで？」

とりあえず聞いてみる

「ええ、お恥ずかしながら」

・・・なんだろう、この空気は

「もしもそこの方、ここでなにをしているのか教えていただけ
ないだろうか」

このなんだか変な空気を壊したのはこの少女の知り合いらしき少女
だった

「・・・何をしているかって聞かれたら何もしていないとしか答え
られないんだけど」

正確に言えば不思議な少女に話しかけられていましたただけど

三人の格好からして旅でもしてるのかな

「そういう意味じゃないのですよ、どうしてあそこに悪者さんがい

るのに平然と見てられるのか風たちに教えて欲しいのですよ」

ああそういう事が

確かに目の前で事件が起きているのに逃げるわけでも近づくわけでもないというのは初めて洛陽に来た人にとってはおかしい事かもしれない

「簡単な事だよ、ここの警備隊は無能ではないって事だよ」

まあ皇帝陛下のいる都市の警備隊が無能だったら結構な問題だと思うけど

「よく意味が分からないのですが」

どうやら三人とも理解できなかったらしいので俺は親切に教えてあげる事にした

「後ろを見てごらん」

そう言つて後ろを振り向かせる

風side

「あの悪者さんを見ている野次馬の中に警備兵が二人いるんだ」

そう言われて見てみると…なるほど確かに周りをよく見ていたり犯人の手の動きをじっと見ていたり他の人とは違う動きをしている人が二人いますね

…風は冗談のつもりで悪者さんと言ったのですがお兄さんが本気で悪者さんと言っていると恥ずかしいですね

まあそんなことは置いといて警備兵の動きは注意して見なければ分かりませんね

実際風も言われるまで気づかなかったのですよ

「だからなにか隙が出来ればすぐに取り押さえられるようになっているんだよ……こういうふうだね」

そういうとお兄さんは何かを投げました

お兄さんが投げたのは筆でした

悪者さんは痛みと驚きからでしょうか

少女を拘束する力が一瞬弱まりその隙に少女は無事逃げ出して先ほどの警備隊の方々に悪者さんは捕まりました

「まあ、こういうことだね」

この人は今の出来事が当たり前のように言つとどこかへ行こうとしました

「あいや待たれい」

星ちゃんが男の人を止めます

「何か？」

この人も引き止められるとは思ってなかったのでしょうね

少々間の抜けた声で聞いてきました

「どうやってあんな細い筆をまっすぐ飛ばしたのだ？」

確かに先ほどの筆は少々短い子ども用の筆でした

そう簡単にはまっすぐ飛ばせないでしょうね

「ああ俺の特技だよ、大体の物なら狙い通りの場所に当てれる」

「なんと」

「さっきの筆は俺が最初に上手く投げれるようになった種類の筆だからね、多分何度やっても同じ位置に

「空！」・・・おおどうした桂花？」

男に話しかけてきたの風と同じくらいの年の子でしょうか？

猫の耳がついている帽子を被っています

「空、そんな無駄話してなくてはやくしてよ、皆待ってるわよ」

「悪い…そういう訳でさよならだ。また会ったらよろしく」

そういうとその男の人は少女と共に去っていききました

「…あの人は何だったのでしょうか？」

「雲のような人でしたね」

その後はなんの事故にも巻き込まれず無事に何？志学院に着きました
残念な事に皇甫嵩さんは不在でした

「どうしましようか」

風はどうしても会いたいのです

稟ちゃんたちには言ってますが実は風は曹操さんには一度会った
ことがあるのです

会ったといっても見かけただけですが

その時の曹操さんは王の風格を出していました

そこで風は思ったのですよ

これと対になって称された皇甫嵩とはどんな人物なのか

「やっぱり予定通り長安に行ったほうが良かったのではないか？」

「いえいえ、長安に行く予定だったのをわざわざ変えてまでも会う
必要があると宝慧が言っていたのですよ」

「おいおい風、俺のせいにするなよ」

誤魔化していますが風は今とっても後悔しているのですよ

「でもほんとにどうしましょうか」

「

・・・すいませんが皇甫嵩殿はいつ帰ってくるのですか？」

「明日の昼には帰ってくると思いますが」

「稟ちゃん？」

「稟それは甘くないか？」

「星、何を言っているのですか。私は折角洛陽に來たのですから数日ここに泊まっっているいろいろ見てまわろうと思っているだけです。まあそれまでに皇甫嵩殿に会えるのでしたら会ってみようと思っただけのことです」

「…稟ちゃん」

風は今とっても泣きそうなのですよ

「というわけで帰ってきたら皇甫嵩殿に一言言っておいて貰えますか」

「はい、分かりました」

風はとっても楽しみでねむれないかもしれませ・・・

「寝るな」

「おお」

・・・普通に寝れる気がします

空 side

今日俺に会いたいという人が来た

これで何回目だろう

しっかりと数えたわけじゃないけど確実に二桁は超えていることだけは分かる

会いに来るのは豪族だったり儒者だったり宦官だったりしたけどその目的は一つ

俺を自分の勢力下に入れること

橋玄・何？・司馬徽

大陸中に名が通っているこの三人に師事した男

そんな有名な人物が自分の傘下に居れば必然的にその派閥の株が上がる

多分そんなのが理由だとは思うけど面白いのは俺に会いに来る人が皆俺が自分の傘下に入ると思い込んでいることだ

中には俺が断ると暴れだす奴もいた

まあそういう奴は『平和的に』帰っていただいたが

だが今回は事情が違う

旅人が俺に会いたいと言ってきたんだ

いつもの通りに不在と伝えさせると俺に会えるまで洛陽に留まるらしいみたいなのを言いてたらしい

別に居留守して諦めるのも良いんだがここまで俺に会いたいと思ってくれてるなら会うのが礼儀ってものだろう

・・・さてどうもてなそうか

稟side

今朝早くに何？志学院の生徒が来て会つらしいから昼頃来て欲しいと言われました

おかしいですね

今日帰ってくるらしい皇甫嵩殿

いかに早く帰ってこれたとしてもそんなすぐに会おうと思うでしょうか？

…少しばかり用心していったほうがいいでしょう

昼頃何？志学院に行くとそのまま客間へと連れていかれました

そしてそこに居たのは・・・

昨日の男性でした

「いろいろ言いたい事はありそうだけど、まずは謝ろう」

皇甫嵩殿が頭を下げる

「別にいいですよ、風たちも急に押しかけたようなものですから」

「そう言ってくれるとありがたい、いや君たちのように俺に会いたいという人が多くてね」

「すべてに相手するのが面倒だから居留守を使ったと」

星が皮肉交じりに返す

「まあそんなに厳しく言わないでくれ、俺にだって予定があるんだ」

「じゃあ何で風たちには会ってくれたんですか」

「んー、知りたい？」

「じゃあいいです」

「おいおい、それは無いだろ」

「お約束ですよ」

「…まあいいや。君たちが今までの人とは違ったからね」

「違った…というと」

「今までの人は大体居留守を使うと皆諦めたんだけど君たちは俺に会えるまで洛陽に留まるらしいと聞いてね、そこまでする人を無視するのは俺の好みじゃないんでね」

「…何となくあなたが評価された理由が分かる気がします」

一見粗暴に見えて繊細な部分を持ち子どものような無邪気さと壮年の大人のような強かさを併せ持つ

これは会ってみて正解だったかもしれない

「空、お茶持ってきたわよ」

昨日皇甫嵩殿を呼びに来た少女がお茶を持ってくる

空というのは皇甫嵩殿の真名でしょうか？

「ん、ありがとうな桂花」

皇甫嵩殿が少女の頭を撫でる

「・・・ふん、持ってきてあげたんだから感謝するのは当然でしょう」

そう言いながら少女は皇甫嵩殿の隣に座る

「君たちもどうぞ。とりあえず俺が知る中では一番美味しいお茶を用意したはずだから」

「頂きましょう」

私にはお茶のことはよく分かりませんが確かに飲みやすい濃さと温度ですね

「まあ改めて名乗ろうか、俺の名は皇甫嵩、字は義真。こいつは荀？文若」

荀文若…荀子の末裔ですか

「本人は荀子の末裔って言われるのが嫌いだからあまり言わないでね」

皇甫嵩殿、あなたは心が読めるのですか

「…何となくなら」

「何故ですか」

「俺は一流ですから」

「むうお兄さん、それは風の台詞だと思うのですよ」

「まあまあ風も稟も落ち着け。私の名は趙雲、字は子竜という…以後お見知りおきを」

星が名前を名乗る

続けて私も名を名乗る

「私の名前は戯志才と申します」

少々無愛想かもしれないが元々偽名を名乗っているので少々名乗る時に違和感があるためこうなってしまうのは仕方がない

「風の名前は程立仲徳、真名は風ですよ」

風、あつて間もない人に真名を預けるのはどうかと思いますが

「俺の真名は空だ、よろしくな風」

皇甫嵩殿、あなたも受け入れないでください

「空さんですか、それではこれからはお兄さんと呼びますね」

…風それでは真名を聞いた意味がないと思うのですが

「さて話を変えるけど戯志才さん…君はなんで偽名を使ってるの？」

「！なぜ偽名だと？」

「名乗るときにちょっとだけ眉をひそめていることに自分で気付いていない？」

…そんな細かい所まで気付きますか

昨日のこともそうですがこの人の観察力は鋭いですね

どんな細かい違和感にも気付く

「その通り私の本当の名は郭嘉奉考、真名を稟と言います」

初めて見抜かれたのです、真名を預けるのもいいでしょう

「二人とも預けたと言うならば私も預けなければなるまい、私の真名は星と言う」

「風にもなんだけどそう簡単に真名を預けてもいいの？」

「風は別に気にしていないですよ」

「私が偽名を使っていることに気づいたのは空殿が初めてなのですから、私も別に」

「空が特別な関係を求めているなら私は別に良いのだが」

星、あなたのそういうところは直すべきだと思いますよ

「いや止めておくよ、嫌な予感しかない」

「おや残念ですな」

「まあこの話は止めよう」

「・・・変態」

「：桂花、今の流れ見てただろ」

それから少し話すことにしました

話していてまず驚いたのは空殿と荀？殿の知識の豊富さです

武術・内政・兵法・戦術・哲学・自然・戦略…

特に空殿は兵法にとっても精通していました

そういえば空殿の伯父は度遼將軍でしたね

「空殿は叔父上から兵法を習ったのですか」

「うーん基本的なことは教えてもらったと思うよ。後は俺の独学」

「なるほど」

「まあ碁盤の上と実際の戦は違うから何処まで通用するかは分からないけどね」

今までの生活で風以外にここまで話せる人はいなかったなので自分でも驚くほど話し込んでいました

またそれは風や星も同じでつい夜遅くまで語り合っしまい宿を取っていなかったの何？さんのところに止めてもらう事になりました

「昨日は泊めていただきありがとうございました」

そう何？先生にお礼を言います

「いえいえ、もう少し泊まっていけばいいのに」

「いいえ、私たちは見聞を広める為に旅をしているので」

「次は何処に行くんだ？」

「そうですね、私は河北のほうに行ってみたいのですが星、風どうでしょうか？」

「風はどこでもいいですよ」

「うむ、私も異論は無い」

そして私たちは河北に向けて旅立っていった

道side

「・・・ふう」

「いいのですか、あの三人について行けばあなたのなすべき事が分かるかもしれないのに」

百聞は一見にしかず

ここでひたすら書物を読むより彼らと共に旅をしたほうが学べる事は多いと思うのですが

「いいんですよ先生、たしかに星達についていけば何か分かるかもしれないませんが俺がついて行っても足手まといになるだけですよ

…空、あなたは確かに凡人でしょう

しかしあなたの今の能力でいえばあの三人にも勝らずとも劣ってはいないですよ

自らが凡人である事に囚われすぎていますね

一度自分がどの位置にいるのか確かめさせる必要がありますね

「その割には少々残念がつているように見えますが」

「そうですね、彼女達と話したことで自分の中でも少しばかり変化はありましたよ」

「ほう、それは興味深いですね」

「それに・・・」

それに？

「華琳にも来たんだ、俺もそろそろかなと思ひまして」

「？、何の話ですか？」

「失礼します、皇甫高殿はいらっしゃいますか」

走って来たのは官吏だった

「皇甫嵩殿、朝廷からの辞令である、謹んで受け取られよ」

空はそれを聞くと私のほうを向いて

「ほら…ね」

声には出さず私にそう言った

三人衆との邂逅『空』を変えるのは風と星と……（後書き）

長いです

いつもの三倍ぐらいの文章量でした

あの三人組との邂逅です

なんか口調が違う気がします……

さて次回はようやくプロローグのところにいきます

いやー長かった

プロローグの後の話を二話書いて黄巾の乱へと行きます
感想お待ちしてします

空と羌族／空の理念と羌族の娘／（前書き）

前話から時間を飛ばして一気に二年後へ

二年間の出来事は順次書いていきます

どうでもいいけど空の声優は緑川光さんにやってほしい

「僕は自分のした事に、一辺の後悔もない。…たとえ何度生まれ変わっても、必ず、同じ道を選ぶ。」

リオン、めっちゃかっこいいわぁ

空と羌族／空の理念と羌族の娘／

（プロローグ直後）

閻忠 side

「それにしても流石は羌族、良馬ばかりですね」

敵将を失った後羌族はあっさりと降伏した

それらを引きつれ城へと戻る

そこで食事を与え帰順する者は雇い、それ以外は食料を与えて帰す

それを繰り返すうちにいつしか我が軍のおよそ三分の一が羌族を
めるようになった

中にはなぜ異民族と同じ待遇なのかと不平を漏らす輩もいるが義真
様から理由を聞くと大体その意見を変える

以下回想

「義真殿、なぜ野蛮で下種な異民族を軍に入れるのですか」

「じゃあ聞くが彼らのどこが野蛮だ」

義真殿今まで感じたこともないような強い殺気を出して私は義真殿の質問に答えることができなかった

「匈奴・羌族は生まれた時から馬術を覚えておりその能力は高く部落内での結束も強い。

さらに俺たちが知らないような物もたくさん持っている…これのどこが劣っているって言うんだ、お前のその考えは漢民族が他の部族よりも優れているという思い込みに過ぎん…はつきり言えば反吐が出る」

言い返せなかった

私は無意識の内に異民族…いや匈奴や羌族といった遊牧民族を理由も無し拒絶していたことに今更ながら気付いた

「・・・別に恥じる事じゃないぞ、閼忠、残念ながらお前の考えはこの国の基本である儒教に書かれているからな。お前のように考える奴がいてもそれはしょうがない事だ」

動かない舌を必死に動かし義真殿に尋ねる

「俺の出身地は雍州安定郡（朝那県）だ、安定郡は羌族の居住地と隣接していて俺の周りには羌族が多くいたし多分俺の中にも羌族の血は流れている」

義真殿が首にかけてある赤い宝石でできた鎖を掴む

「俺は凡人だ、だから全てを守れるなんて思っていない…だがせめて俺の腕の中にある物だけは守りたい」

それは子どもが親を守りたいといった物と同じ純粋な希望

だが義真殿、いや義真様の瞳は決意で固められていた

回想終わり

気付けば義真様は街へと出かけようとしていた

異民族を漢民族と同等に扱う事を好としない輩は多くいる

そういった輩は十中八九義真様を狙っている

わたしはあの時の忠誠と誓いを胸に秘め義真様の護衛のためについて行く

街に出るといつも通りの賑わいだっ

北地郡のある涼州は帝都洛陽からも遠く人口も少ないのだがその少ない人口の内の二割が北地郡及びその周辺にいるのだからこの賑わいは当然とも言えるが

もつとも人口が多ければそれだけ悪事狼藉を働こうとする者は多いのだが

「おい、このクソガキ逃げんじゃねえ」

「なにやら騒がしいな、忠行くぞ」

「ハッ」

駆けつけてみるとどうやら店主が盗みを働いた子どもを捕まえていた

「このクソガキが、人様のもの盗んでんじゃねえ」

店主は子どもをボコボコと殴り始めた

・・・いくらなんでもすこしやり過ぎではないか

そう思い、止めに入ろうとすると

「待て、店主」

義真様が止めに入った

「太守さまちよつと待っていてくたせい、このクソガキを躰けてやんなければいけねえんで」

「いくらだ」

「へ？」

「その子が盗んだ物の値段はいくらだと聞いている、その子が盗んだ物の金を俺が払えば盗みにはならないはずだ」

「いえ、太守さまそんなことしちまったら、このガキは懲りずにまたやりますぜ」

「ここ北地郡で盗みをしなければならぬほど飢えた者がいるのはこの太守である俺の責任だ、その子を許してやって欲しい」

そう言つて義真様は頭を下げた

これには道行く庶民も驚いている

当たり前だ、ほとんどの場所で官吏は権力をかさに着て威張り散らすものばかりなのに自分よりもはるかに偉い太守が一庶民に頭を下げているのだ

「いや、頭を上げてくだせいよこれじゃ俺が悪人になっちまう、ほらガキもつすんじゃねえぞ」

そう言つて髪を掴んでいた手を放す

「すまん」

「いえ、太守さまのお陰であつしたちは安全に商いが出来るんでさあ、礼には及びませんよ」

「いや、民たちが税を払いお前たち商人が物を売ってくれるから俺たち役人は生活できるんだ、礼を言つべきなのは俺たち役人だ・・・ところでその子」

「許して、もうしないから」

義真様は震えている少女に話しかける

腕で頭を庇い泣いているその子を義真様はしゃがみ視線をあわせそつと抱きしめる

「大丈夫、俺は君を傷つけたりしないよ」

優しくなだめるように言つ義真様

「本当？」

顔を上げ義真様の目を見る少女

「ああ、本当だ」

それを優しく微笑みかけ答える義真様

「本当に本当？」

念をおすようにもう一度聞く少女

「ああ、本当に本当だ」

頭を円を書くように撫でる義真様

「本当に本当に本当？」

それでもやはり不安なのかもう一度聞く少女

「本当に本当に本当だ」

少女をそつと抱きしめ答える義真様

「本当に本当に本当に本々」もういいでしょう」

しまった、あまりのしつこさについて言ってしまった

「義真様、貴方は子どもですか」

「いや、なんか俺から止めるのは負けた気がしてな」

ふいに少女の腹から音になる

「お前、腹が減っているのか、俺らも今から飯を食いに行くんだ、お前も来いよ、もちろん俺の奢りだ」

「行く行く」

「ちょ、お前はしゃぎ過ぎだ」

空 side

「ねえねえ、お兄ちゃんは何でボクに優しくしてくれるの？」

餃子を口いっぱいにはうばりながらそう聞いてくる少女―名前は姜維というらしい

「俺はこの太守…簡単に言えばこの街で一番偉い人なんだ、だから俺が一番偉い人として街の皆が幸せになれるようにしなきゃいけないんだ、それはもちろん君みたいな子どもがお腹をすかせて困らないようにする事もその仕事の一つなんだ」

太守という官職の義務を簡単に説明する

・・・まさか水鏡女学院で司馬徽先生に代理で教師をやらされた経験がここで役立つとは思わなかった

「へえ、それって他の街から来た人でも？」

「たとえ他の街から来たってここに来たからには俺にはそうする必要があるよ」

「へえ・・・それってボクみたいな羌族でも」

「ん？、ああ。当たり前だ、羌族だろうと邸族だろうと烏桓だろうと山越だろうと扱いは変わらないよ」

拉麵をすすりながらそう答える

一つ北方民族じゃないものが入っていたが気にするほどでもないだろう

「…スツ…ぐすつ…」

気付けば姜維は泣いていた

「俺がなんか変な事言ったか？」

「ううん、違うよ。ボク部族の皆と離れてこの国に来てから羌族っただけで殺されかけたりされたんだ、だからお兄ちゃんが羌族のボクでも扱いは変えないって聞いて嬉しくて」

「そうか」

それだけ言って頭を撫でる

もし俺がああの時の俺だったら迷わず華琳のように動いていただろう

違う地方の出身だから…、農民だから…、異民族だから…、

そんな理由で差別される事のない人が人として生きられる世界

そんな世界を作られるほど俺の能力は高くない

だが目の前で泣いている少女を助けられないほど劣っているわけでもないと思いたい

俺は首にかけてある赤い鎖を掴む

この問題は凡人である俺がしゃばるような物じゃないんだがどうやらアイツとの約束に絡んでくるとどうも自分を抑えきれなくなるらしい

・・・だがまずはこの少女を泣き止ませてからだ

それぐらいいいだろ？水晶

空と羌族／空の理念と羌族の娘（後書き）

オリキャラが出ました

生姜繊維こと姜維です

恋姫公式小説で姜維は五胡の王劉豹の子供っていう設定だけど正確にはどこの部族なのだろうか

史実であれば劉豹は南匈奴の左賢王だけどその嫡子劉淵が生まれたのが251年、姜維が生まれたのが202年

いくら劉豹の生没年が不明だからって強引過ぎたと思う

まあ別にこのSSには関係ない（勝手に羌族に設定したから、だって羌と姜って似てるもん）けどなんとなく気になる今日この頃

儒教と異民族との関係は次回ちょっとだけ解説します

感想お待ちしています

月見酒〜後悔〜（前書き）

前回の話の続きですけど

緑川光さんって恋姫の左慈役だったんですね
声が違ったから気づかなかった・・

月見酒〜後悔〜

語り side

漢帝国の領内の北西部に位置する涼州からさらに北西に進むと羌や匈奴の住む土地にたどり着く

ここの冬は涼州に比べてもはるかに寒く厳しい

故に羌族や匈奴は生き抜くために月日を重ね自らの体を強化させていき、生き残る為に遊牧という手段をとった

そして鍛えられた肉体と生まれつき持ち合わせているその馬術の才能を持つ彼らを異民族と呼びどの時代の人々も恐れた、そして自分たちと違う彼らを蔑んだ

そもそもこのような民族差別が始まったのには二つの理由があるだろう

一つは春秋戦国時代に齊・燕・趙・魏などの諸国が辺境を守るために作ったものを始皇帝が大増築した万里の長城

境界を作ることによって境界のこちら側と向こう側は違うという意識を生み出させる事は用意だろう

冷戦時ドイツがベルリンの壁によって資本主義と社会主義に分けられたのも一つの例と言えるだろう

もう一つは後漢王朝が国の基本とした儒教だろう

後漢王朝における儒教の特徴はやはり罪を犯したものを罰せずに反省を促させるという寛治と呼ばれる政治体制だろう

古代の王朝では徳のある者こそが至上という考え方があった

徳のある者は傷つかないという考えから罪人に熱湯の中に腕を入れさせ火傷しなかったら無実という裁判方法まであったらしい

寛治とは部下の罪を笑って見逃してやるぐらいの徳はあると表現したかったのだろう

実際に『後漢書』には皇帝や有能な臣下の評価に“寛”という言葉が多く使われている

結局は寛治によって弛緩した役人に対する反乱が黄巾の乱で漢王朝を滅ぼすきっかけになるのだが・・・

さて話が逸れたがここで言いたかったのは儒教において徳こそが全てであり、中華と夷狄（異民族）は人間的に異なり中華が夷狄の君主となるべきだ華夷思想かいしそうと呼ばれるものが存在するということだ

実際魏呉蜀の三国を滅ぼした晋も儒教を基にしており江統という人物が華夷思想をさらに発展させ夷狄を中国から追い出すべきだという考えを『徙戎論』しじようろんで表している

このように能力がありながら異民族と軽蔑されてきた彼らだがその力を上手く使いこなす事が出来るのなら天下を手中にし漢を凌ぐ大帝国を築きあげることが可能かもしれない

漢帝国の領地を抜けさらに北へと進んだ草原、そこに空はいた

草原には空には空のほかに男が一人おり彼らは二人で酒を飲んでいた

「空、なぜお前は役人になどなろうと思ったのだ」

男は杯に酒を注ぎながら空に尋ねる

空には満月が浮かんでいる

辺りに置いてある樽の数からして一般人なら泥酔してもおかしくない程の量を飲んでいるはずなのだが男の口調はしっかりとしていた

「そうだね・・・俺の知り合いに華琳って奴がいたんだ、華琳は天才って言葉がそのまま当てはまるような奴で何をやらせても平均以上をたたき出すような奴だったんだ」

空は酔っているのかいつもより雄弁だった

「ほう、それで？」

男は身を乗り出し空に続きを促す

「華琳と俺は同じ塾に通っていたが華琳はある土地の太守に任命されたんだ。その時は別にこれと言った感情は沸かなかったんだがそこに桂花って奴がきてね、そいつを見たときに思ったんだ…ああ華琳と同じだったね」

月が雲に隠れていく

「？、どういうことだ」

「死兵って言えば分かるかな…自らを殺してでも目的を達成しようとするそんな奴だったってことだ」

「別にそれぐらいこの世界探せばいくらでも居るだろう」

男は空の発言が心底疑問なようだ

「…確かにそうかもな、燕、自分を殺してまで目的を達成するってどれくらいツライと思う？」

「・・・そういうことか」

「ああ自分の気持ちも自分の大切な物も全て自分で捨てて前に進むんだ、その苦しみは他人が想像出来るものじゃねえよ・・・その事は誰よりも俺が分かっているつもりだった…でも本当は何も分かっていたいなかった」

空の杯を握る手が赤く充血していく

雲が開け月の光が空に降りそそぐ

「そんな時にある旅人たちが俺を訪ねてきたんだ。そいつらは長い間旅をしてきたらしく大陸各地のいろいろな話をしてくれたんだ。その話を聞いていると俺の中である感情がわいてきた」

空は話を区切り空に浮かんでいる満月へと手を伸ばす

「この広い世界で俺の力はどこまで通用するのかってね。自分の能力は凡庸なものということは知っていた。それでも試してみたかった。……ふふ、何でこんな事思ったんだろうな」

「……一つ聞こう、お前はその少女に好意を抱いていたのか？」

「あれ、俺華琳が女だつて言ってたっけ？」

「お前の話ぶりから推測することは容易さ」

「……まあいいや、恋……とは多分違うな。俺にとって華琳はもう一人の自分のようなものだった」

「もう一人の自分……か」

「この話は止めよう、寒くなってきた」

空たちは草原から去る

月はその役目を終えたかのように再び雲の中へと隠れていった

語り side

「――て、空兄ちゃん起きて」

「ん…すう…」

一人の少女が空を起こしているが空は起きる気がしない

「もう仕方がないな」

そついうと少女は寝台の端に立って

「えい」

「ぐはぁ」

可愛い声で空の鳩尾に向かって全体重を乗せた肘鉄を繰り出した

「ううー」

「ほら、空兄ちゃん朝だよ」

空は肘鉄を食らわしてきた少女を見る

「み、蛟!？」

「空、起きたか」

「・・・なあ燕、ここって匈奴の土地だよな？」

「うむ、ついでにいえばこの俺、劉豹が单于を務めているが」

「じゃあなんで羌族の蛟がいるんだよ」

「...その話は少々長くなる、仕度をしてから来い」

「まず最初に言っておくが匈奴と羌族は元々同じ民族だ」

空はお茶を飲みながら燕の話の聞く、蛟は興味がないのか空の膝の上で本を読んでいる

「...マジで」

「正確に言えば羌族は南匈奴に滅ぼされた北匈奴の王族で唯一生き残った無弋爰剣が地方に散らばっていた北匈奴や周辺の少数民族を配下に収めてできた民族連合だな」

「簡単に言えば純粋な羌族は居ないってことでもいいか」

「ああその認識で構わん。最初南匈奴（解説のため匈奴ではなく南匈奴とさせていただきますby作者）の勢力は羌族より圧倒的に強かったため羌族を放置していたが、時が経つにつれその勢力は衰えていき南匈奴と羌族の勢力はほぼ均衡状態となった」

「まあ匈奴は武帝の時に結構厳しく討伐されたしな」

「…そういうことだ。羌族の祖無弋爰劍は自分達が滅ぼした北匈奴の王族、ただでさえ南匈奴を憎んでいるのに勢力が均衡している今攻め込まれる可能性を否定できなかった南匈奴は焦った。そして出した答えが当時の羌族の王迷当に王族の娘を差し出して関係を修復しようというもの」

「迷当もいつまでも互いに憎みあうのは下策と判断し周囲の反対を押し切り娘を娶り南匈奴と羌族は同盟関係を結んだ。これ以降互いの部族の王が変わるたびに女を送った…ってところか？」

「ああその習慣は今も続いていて蛟の母親は俺の妹になる」

「なるほど最初呼ばれたときは畏かと思ったがそういうことか」

「蛟の恩もあるが実際お前には感謝しているさ、異民族って蔑まれてきた俺達に対等に接してきて食料や飼葉を提供したのはお前だけだ。お陰で俺達の生活はかなり楽になった…それが分からず攻め込んだ馬鹿もいるが」

「いいさ、結果的には何も無かったんだ」

「そう言われるとありがたい・・・ちなみに今回呼んだのにはもう一つ理由がある」

「？」

「蛟は俺の妹の子だと言ったな」

「ああそれが？」

空の様子を笑いながら燕は話を続ける

「さっきの話を思い出せ。匈奴は王が変わるたびに女を送った」

「・・・えーと、ほんとに？」

「俺が冗談を言うような奴に見えるか？」

「だって・・・」

「そうだ。蛟は羌族の王族の一人…正確には現单于の一人娘にして次期单于候補筆頭だ」

「じゃあ何で北地郡にたった一人で来たんだ？次期单于候補筆頭なんて羌族の最高機密だろ」

「そこが羌族とお前たち漢民族との違いだ、羌族は次期单于候補全員に自分の身分を知らせず見知らぬ土地に置いてきてそこから無事戻ってこれるかを試験するのだ」

「そういうことか」

「そういうことだ」

「どういうことだ？」

「難しい話は置いて羌族からの礼として一頭の馬を献上するよ、

空兄ちゃん着いてきて」

蛟が空の手を引く

蛟の案内で着いた場所には一頭の馬がいた

その白い毛並みは日の光を反射し純白の輝きを持ちその馬の周りだけ空間が違つような感覚に空は襲われる

「この馬は？」

空は知らず知らずの内に馬に手を伸ばしていた

その馬が空を見つめる

その瞬間、空は形容しがたい感覚に襲われる

それが何なのか分からぬままに空は馬に飛び乗る

「…走れ」

一言命じる

馬は空の言葉が分かるのだろうか

何もつけてない状態で空を乗せて走っていく

スツと周りの景色が変わっていく

最初はその速さに驚いていた空だったがその内慣れ始めると馬を操り昨日酒を飲んでいた草原へと向かう

「止まれ」

もう一度命令する

馬はゆつくりとその速度を落としていきやがて止まる

空は馬から下りると馬の顔を撫でてやる

「蛟、この馬は？」

後からやって来た蛟に空は声を掛ける

「今から大体400年前にある馬が羌族の地に現れたんだ、その馬はとても速かったけど気性が荒くて誰も乗りこなせなかった…その馬の名は・・・騅、その子は騅の子孫になる」

ヒヒンと馬が嘶く

「そっか…じゃあコイツの名も騅だな」

この後空が騅を愛馬としたことは言うまでもない

月見酒〜後悔〜（後書き）

今回書いた匈奴と羌族の設定はオリジナルです

北匈奴が中華圏から消えたのは永元3年（西暦91年）で無弋爰剣が出てきたのは紀元前5世紀といわれています

さらに言えば迷当は後漢代の羌族の王で無弋爰剣は秦の奴隸だった
が逃げ出し羌族に農耕なんかを教えたので羌族の諸侯が担ぎ上げたので匈奴とは何の関係ありません

本当はこんな感じの話ではなかったのですがよくよく考えたら匈奴と羌族の漢民族への感情を良好にしておかないといろいろおかしくなるのでこうしました

今回は端折った部分があるので説明とききます

前話の最後↓数日後蛟が去る↓匈奴に会談を申し込む、快諾されて
閻忠ら反対するが空は行く↓燕は空を殺す気でいたが話しているうちに意気投合↓2ページの部分

となります、分かりづらくてすいません全部書いたら纏め切れませんでした

感想お待ちしています

第二幕『黄巾之乱』予告

史書に長きにわたった戦乱の始まりと記された黄巾の乱

この外史においてそのきっかけはある歌手達のファンの暴走だった

彼女たちの歌を聴き半ば洗脳状態となった者たちは善悪の区別がつかずただ命じられるまま官舎を襲った

無論襲われた役人にも非はある

だが彼ら役人はそんな事すら気づかないほど腐敗していた

そして彼らはたかが農民の反乱と侮り地方の官軍を出し鎮圧しようとした

まともな訓練も受けていない農民達など腐敗しているとはいえ訓練された官兵に勝てるはずがない

そう考えた彼らの予想は半分は当たった

当たったのは反乱軍は予想通りまともな訓練を受けておらずまともな統率が出来てなかった事

当たらなかったもう半分は彼らの狂気とも言える自己犠牲の精神だった

合戦の最初は官軍有利で進んだ

このまま敵の大將を討ち取って終わり

将だけでなく兵までそう思っていた

だが結果は彼らの予想と反する物だった

合戦の最中どこから歌が聞こえてきた

それを聞いた途端反乱軍の纏う気が変わった

それは黒くそして白いものだった

そして何かに取り付かれたように官軍に向かって突撃し始めた

足を矢に射られても、腕を斬りとばされても突撃する

狂気の沙汰としか思えないこの行動に官軍は指揮系統が崩壊

結果、指揮官を含めた30000の兵全てが殺された

そしてこの結果は風に乗リ各地へと伝えられた

そしてこの勝利に乗じて中華大陸13州のほとんどで漢王朝に対する反乱が起きた

これに怯えた中央の役人は地方の豪族等を含めた大規模な討伐軍を編成しこれを討つよう霊帝に上奏した

霊帝はこれを了承し13万の大軍を編成し涼州で羌族・匈奴の侵攻

を防いでいた皇甫嵩を左中郎将に、現役将校の中でもっとも戦の経験が多い朱儁を右中郎将に任命し討伐軍の大將として討伐へ乗り出した

やがてそれは勅命として各地へと伝わる

「俺が大將！？勘弁してくれよ」

「義真様、これは勅命ですよ」

「皇甫嵩？誰だそれは…まあ誰だろうが構わん。わしは漢王朝に反する賊を討つだけだ」

「我ら官軍と共に賊を討つべし…ね」

「華琳様、どうなさいました？」

「なんでもないわ秋蘭、戦の準備をお願いね」

「はっ」

「まさか官軍の大將になるとはね…ふふ」

「きーー、何で私でなく空さんが大將ですの」

「姫、落ち着いてくださいよ」

「要は皇甫嵩つて奴を斬ればいいんだろ？」

「文ちゃん、それじゃ逆賊になっちゃうよ」

「七乃、妾はこんなことより蜂蜜水が飲みたいのじゃー」

「はいどうぞ、美羽様。こういう面倒なことは孫策さんたちに任せておきましょうね」

「策殿、袁術が呼んでおるぞ」

「面倒くさいわね、どうせ反乱軍を討てとかそんなものでしょ」

「・・・雪蓮」

「分かってるわよ、冥琳。この乱に乗じて私たちの名を上げる、朝廷には悪いけどこの機会利用させてもらうわ」

「あら空君も頑張っているようね」

「おかーさん、おなかすいた」

「はいはい璃々。ご飯にしましょうね」

「おのれ賊共め民を虐げるとは」

「許さないのだー」

「本当に反乱を起こした人が悪いのかな」

「母様、こんなの来てるぜ」

「どれ見せてみな・・・翠、蒲公英たちを呼んできな」

「はわわ、雛里ちゃん。空さんが大将だつて」

「あわわ、空さんって今涼州だね？」

「わわわ、あいつが大将とは朝廷も人材不足だな」

「ほわわ、朱李ちゃん。そんなこと言ったらまた怒られちゃうよ」

「…空賢い…いい選択…だと…思う」

「ふふ朝廷も硝子に魅せられましたか。好々」

漢王朝が巻き起こした小さな風はやがて大きなうねりを経てまた漢王朝に吹きすさぶ

それが漢王朝に巢食う悪を払う突風となるか、漢王朝を滅ぼす台風になるか

それは未だ分からない

下準備〜フラグ祭り開演〜（前書き）

下準備です

只々下準備です

下準備〜フラグ祭り開演〜

語りside

その集団は涼州から洛陽へと向かっていた

数は3000程度だが物静かに進むその姿はしっかりと調練されている事が窺える

この集団を率いている青年は黒を基調とした長袖の服を着て赤色の宝石で作られた鎖を首にかけ腰に柄に赤と黒の二つの水晶がはめられている一振りの刀を差していた

青年の白銀の髪と青年が乗っている馬の純白の毛並み、そして青年の後ろから射している朝日が合わさりどこか神聖な雰囲気醸成していた

この姿を見た農民たちは気付かぬうちに平伏していた

「まさか本当に俺が大将になるとはねえ」

青年は腰に差してある刀を確認しながら後ろに居る男に話しかける

「まあ勅命としてきたのですから実は嘘でしたなどということはないでしょう」

男は青年の部下だろうか

青年の後ろにいながらもいつでも青年の前に行けるような微妙な位

置にいた

「しっかしこれは注意したほうがいいかもな」

スツと青年の纏う雰囲気が変わる

「何故まだ若く経験も浅い義真様と経験豊富とはいえ官位の低い老将朱儒將軍が選ばれたか、ですね」

男も青年の雰囲気の変化を察し青年の疑問を代弁する

「考えられるのは先日の党錮の禁により軍を率いる事のできる人物がほとんどいなくなり実際に兵を指揮したことのない武官よりもまだ経験が浅くとも何度も戦を経験している俺のほうが良いと判断したため」

青年は刀をガチャガチャと揺らしながら己の考えを述べる

「加えて異民族の侵攻は古代の王朝を悩ませてきた問題。それを短期間とは解決したため義真様に白羽の矢が立った……しかしこの理論で言えばまだ引退して間もない張奐殿や党錮の禁で罷免された皇甫規殿でも良いはず」

男は青年の考えを補足しつつ自らの考えを口にする

「伯父は自分たちが罷免させたようなものだから呼び戻すなんて体面ばかり気にする宦官やそれについてまわる役人には無理だろう。まあ細かい事は放っておこう……まずは……」

パンッ

青年が握り締めた右の拳を左手にぶつける

「どんな理由があろうとも陛下に刃を向けた馬鹿を肅清する、そんな俺になにか仕掛けようとしている奴もぶっ潰す」

先ほどまでの冷静な雰囲気は消えうせ年相応の若さと力強さが戻る

兵達はそんな青年の変化に微笑みつつ洛陽への道をただ進むのだった

空 side

本当なら明日の出陣に向けて準備するべきなんだが俺が連れてきた兵は今日洛陽に来たばかりでいつでも出陣できるし俺に与えられる官軍の兵たちは朱儁將軍が準備してくれるらしいから特にする事が無い

あるとすれば兵糧などの物資の受け取りだがこれは俺の要望が通り国庫の物が支給されるらしくまだ準備が終わってないらしい

国庫を開くよう要請したのは官軍の基本方針を知らせるため

国庫とは簡単に言ってしまうえば国の備蓄だ

大量の物資を保管しているので兵が多くとも長期戦が可能になる

これは何の計画も無しに反乱を起こし補給機能が皆無と言っていい
黄巾党と比べ有利な点だ

“ 此方の物資を守りつつ黄巾党の物資を減らしていく ”

これを基本方針として長期戦覚悟で鎮圧する

どんなに士気が高い兵でも満足に食事や睡眠が取れなければ弱っていく

もちろん黄巾党の中にも頭が回る奴はいるだろうから俺の意図を見抜いて物資の防御に力を入れるだろう・・・それが畏とも知らずに

物資の警備に力を注げば注ぐほど本陣の防備がおろそかになる

それに気付いて本陣の防備に集中すれば今度は物資が奪われる

結果どうすればいいのかわからなくなり自爆すれば僥倖

そこまで行かなくても兵が移動する道を辿れば本陣が分かる

長期戦のように見せかけて短期決戦

・・・まあ華琳ならこれぐらいすぐに思いつくかな

語り side

「・・・やはり無理か」

空に宛がわれた屋敷の一室で閻忠は届けられた返事を見てそう呟く
基礎を叔父の皇甫規から学んだとはいえ空の兵法・軍略は自身が積み上げてきた知識と実体験の中から生み出されてきたものだ

だからこそ空の戦術は強く脆い

強いのは自らの経験に裏打ちされた策は空が自信を持って行えるため揺らぎにくいこと

脆いのは水上戦のような空が経験した事の無い戦では空の戦術は通用しない事だ

いくら戦術眼に優れているとはいえそれは凡人という枠の中でという前提がつく

神算鬼謀の持ち主でも天性の戦上手でもない空の戦術は良くも悪くも基本に忠実でありそれを応用した物にすぎない

さらに付け加えれば空以外に現時点で皇甫軍を指揮する者がいないことも脆いといわれる原因だ

今までは兵の数が少なく連戦ではなかったため問題ではなかった

だが今回の戦は違う大規模の軍勢を長期にわたり動かすのだ

肉体的な疲労はもちろん精神的な疲労もかなりのものになるだろう、
そんな状態で戦に挑めばどうなるか

その答えはもちろん死だ

それが分かっているから閻忠は軍師を求めた

だが空と同等以上の戦術眼を持ち尚且つ空とは違う視点で物事を見
れる人物などそう簡単に見つかるはずもなく、彼唯一知ってい知り
合いからも今断られたばかりだった

「…どうすべきか」

そう呟く声は洛陽の街へと消えた

「貂蝉、これはどういうことだ！」

何も無い真っ白な空間で一人の男―左慈が貂蝉と呼ばれた漢女に怒

鳴りつける

それに続けてもう一人の男―于吉が貂蝉に話しかける

「我々否定派と貴方たち肯定派の間には必要以上に外史に『北郷一刀』を送らないという取り決めがあつたはずです、それを知らないあなたでは無いでしょう」

疑問の形で聞きながらもその目は鋭い

「あーら、アナタ達は何も知らないのね」

貂蝉は彼らの怒りに顔色一つ変えずそう言いのける

「どういふことですか」

激怒する左慈を宥めながら于吉は尋ねる

その瞳には適当な事をいえば容赦はしないと言っているようだ

貂蝉はそんな于吉の様子を笑いながらこう告げる

「…外史はさまざまな可能性を秘めている」

「!?!?…いえ、まさか…そんなことは」

于吉は貂蝉の言葉を理解したのか急に黙り込む

その顔には驚愕と歓喜が浮かんでいた

「分かったかしら？・・・とにかくあの外史に干渉するのは止めてたほうがいいわ、ワタシ達の大願のためにも…ね」

それだけ言って貂蟬は去る

残ったのは歡喜の表情を浮かべる于吉と状況が飲み込めてない左慈

「おい于吉どういうことだ」

左慈は于吉に尋ねる・・・がすぐに于吉と同じ歡喜の表情を浮かべる

「あの外史には——様がいるのですよ」

于吉のこの言葉によつて・・・。

下準備〜フラグ祭り開演〜（後書き）

はい、わざとらしい伏線を敷いて終わります

最初に言つときますが白装束は無印のように歴史に介入しません、傍観者のなポジション

二幕が始まったのですこし説明を

Q1 空の性格

― A1、空の性格を一言で表すなら『矛盾』一番分かりやすいのは捌話と拾参話の華琳についての感情の部分かな

Q2、空つてチート？

― A2、ぶつちやけ魅力チートは持つてると思う、史実の曹操みたいな感じにする予定

Q3、オリキャラ多すぎじゃない？

― A3、flowerはオリキャラ「原作キャラだと書きづらい部分を肩代わりする人物（一部除く）」っていう風に定義しているからどうしても多くなつていくことは謝る、でもオリキャラを出した意味はしっかり描く予定でヒントも本文で出したりする（例えば何故咲里だけ口癖が無いのか・・・とか）

V S 波才 第一部野戦（戦闘描写ナシ）（前書き）

やばい、スランプかもしれない

V S 波才 第一部野戦（戦闘描写ナシ）

洛陽城外に集まる13万の軍勢

計26万の瞳が見つめるのはこの討伐軍の大將の一人皇甫嵩義真

「——確かに黄巾党の言い分も分からないでもない…だがそれを力で解決しようとするならそれは止めなければならない。この戦は激戦となるだろう…しかしこの戦を乗り越えたときもう一度平穏なときが訪れると俺は信じている…だから俺に力を貸して欲しい」

空の演説が終わる

少しの間訪れる静寂

兵の中には涙する者もいた

空は全軍…いや洛陽中に聞こえるように言い放つ

「全軍出陣！！」

「
—————！！！！！！———」

言葉にならない13万の咆哮が洛陽に響く

予州方面

皇甫嵩軍

大将 皇甫嵩

副将 閻忠

兵数 4万

朱儁軍

大将 朱儁

兵数 4万

涼州方面

何進軍

大将 何進

副将 張遼

軍師 逢紀

兵数 3万

？州方面

丁原軍

大将 丁原

副将 呂布

軍師 陳宮
兵数 2万

討伐軍の大將である空と朱儁が黄巾党の大將張角がいるとされる冀州ではなく予州に進軍しているのは朝廷の官吏が張角より洛陽に向けて進軍している波才の方が優先順位が高いと判断した為である

官吏たちは皇帝陛下の御身の安全を考えて…などと言っているが自分たちの身と財産が失われるのを恐れているだけという事は周知の事実だろう

…そんなことは置いておいて

予州に曹操軍 8千

幽州に公孫賛軍 7千

冀州に袁紹軍 4 2 2 3 4 人と董卓軍 7千

涼州に馬騰軍 2万

荊州に劉表軍 1万

揚州に袁術軍 4 2 2 3 5 人

益州に劉焉軍 1万

徐州に陶謙軍1万

青州に孔融軍1万

といった地方の軍閥が各地で討伐軍を起こした

討伐軍に比べると兵数・兵糧等で見劣りするが馬騰・劉焉・劉表・陶謙・孔融以外は一都市の太守の身で5千を超える兵を用意できたことだけでも賞賛に値すべきだろう

そういう観点で見れば何故袁家が弘農郡の楊氏など他にも四世三公の家が有るにも関わらず朝廷内で絶大な権力を持っていた理由の一端が垣間見えるだろう

ちなみに数字が細かいのは袁家の当主達が互いに意地を張り合った結果である

空 side

討伐軍が洛陽から出陣して幾数日経った

今俺達が居るのは小高い丘の上、護衛は北地郡から連れてきた騎兵のみ

「…さてさて朱將軍はどんな指揮を見せてくれるのかな」

眼前の兵の群れを見ながらそう忠に話しかける

「数の利をわざわざ捨ててまで単独で波才との戦いに挑んだ理由とは何でしょうか？」

予州黄巾党討伐に当たって拠点する予定の長社城に入った俺達がまず最初に受けた報告が先に入城していた朱將軍が自分に与えられた兵を連れて勝手に進軍したという情報

波才軍はおよそ5万、朱儁將軍の兵は俺と同じ4万

戦の基本は敵よりも多くの兵を集めること

党錮の禁で叔父の皇甫規を含め多くの有能な武官が罷免されたとはいえ討伐軍の大將に選ばれるような人物がそんなことを知らないはずがない

何も考えてないのか、何か考えがあるのか・・・ん？

ふと前を見ると波才軍が奇妙な陣を築いている…あれは・・・

「忠、突撃用意。俺は城に戻る」

それだけ言って長社城の方に馬首をめぐらす

「は？」

まあ普通はこういう反応するか、アレを知っている奴なんてなかにかいないからな

「今回の戦は負けだ…それも圧倒的な敗北だ、勝敗が分かっている戦を傍観する趣味は俺にはない」

「しかし…いえ、武勇一辺倒の私が何を考えても意味がないでしょう…全軍騎乗」

俺が北地郡から連れてきた兵は数は少ないが羌族や匈奴と渡り合えるほどの練度を誇る

あの陣は厄介だが無理に攻めようとしなければ忠なら対処できるだろう

兵達に幾つか指示を出す

どれほどの努力を積んでもやはり俺は凡人だな

事態の危つさを理解していながら事前に止めることより被害を最小にする方法を考えている

「ふッ」

自分で自分を笑ってみる

まあいいさ、俺は俺なりの方法でこの乱を治めてみせる

だからさ

もう少し待っててくれよ、水晶

語り side

何もない真っ白な空間、否そこには三つの人影

「朱儁は波才に敗北し皇甫嵩は長社城に籠る…ここまでは歴史通りですね」

空間に響く男の声

「しかし本当に何もなくていいのか？」

それにかぶせるように言葉を放つ男の声には疑問と僅かな無力感が表れていた

「逆に何もしてはいけないのよ。
今までもあの方が誕生する可能性を持った外史は幾つもあったわ、

でもここまでの好条件が自然に揃ったのは今回が初めてなのよ。

それにあの方は存在するだけで全てを変えてしまうような方、下手に介入して外史がバランスが崩れてしまうことだけは避けたいのよ・
・まだ花は咲いてないのだから」

花は咲いてない

つまり種は芽生え、芽は出ているのだ

蕾が出来るとき

世は乱世か、太平か

v s 波才ゝ第一部野戦（戦闘描写ナシ）ゝ（後書き）

どうも最近反董卓連合の話ばかり思いつくというおかしい現象にかかりつつあるflowerです

長いようで短い今話

今回は史実皇甫嵩最有名なアレが出るとおもいます

中華大陸13州のうち司隸と交州は飛ばしました

交州は士燮親子しか知らなかったから司隸は洛陽近くに黄巾党いた
ら討伐軍なんて派遣できないと思ったからです

張遼はこの時丁原の部下なのですが何進軍強化のために配置を変え
ました、まあ何も書きませんが（笑）

袁家の力云々はflowerの疑問点

弘農郡の楊氏は鶏肋が曹操に士官してるし、周瑜の家も二世三公の
家柄なのに袁紹と比べたら・・・

まあいいです、11時ころに鳳徳別伝を投稿します

感想お待ちしています

v s 波才ゝ第二部長社城の火劇ゝ（前書き）

初戦闘描写

上手く書けたか心配です

vs波才〜第二部長社城の火劇〜

波才side

先日朱儁を破ったときに捕虜にした兵が言うには討伐軍の本体である皇甫嵩・朱儁軍は長社城に籠るらしい

虚報かと思ったがどうやら真実のようだ

「無理に攻めようとするな、気を抜けば城が落ちるそう思わせられればそれでいい」

いくら兵数が多く忠誠心が高い親衛隊でも元をただせば唯の農民

強引に攻めれば落とせるかもしれないがこの後洛陽に攻め込む予定のこの軍はできるだけ損失を抑える必要がある

長社城を囲んで幾数日

脱走して投稿する兵も多く当初二倍以上あつた兵力差も今ではこちらが勝っている

「波才様、どうやら右中郎將の朱儁が脱走した模様です」

「そうか、ご苦労」

確か討伐軍の大將の片方だつたな…やはり漢王朝には腰抜けしかないらしい

・・・頃合か

「誰がある」

「はっ」

「全軍に伝達、今夜夜襲をかける、今度の戦で長社城を落とすぞ」

空 side

「將軍このままでは全滅するだけです、夜陰に紛れて脱走しましょう」

そう俺に進言してきたのは陛下から借り受けた兵の調練を受け持っていた將校

確かにそれも一つの手だがこの場合では下策中の下策だ

「お前たちは馬鹿か」

「なっ…失礼ですが馬鹿な方は將軍です。」

投降した兵を加えた波才軍は約六万なのに対してこちらは約三万、この兵力差が分らないのですか」

「だからお前は馬鹿なんだ、いいか戦いは臨機応変の策にあつて兵数っていうのは問題じゃない。」

いま波才軍は草原に陣取っているから夜中に火を放つてやれば絶対に驚いてボ口を出す。」

その時に城を出て四方から攻撃すれば、田単の功績を成し遂げられるぞ」

「そんなにうまくいくのでしょうか？」

まだ不満を言ってくるがさつきよりもその言葉は弱い

しょうがないな、こういうのはガラに合わないんだが

俺はその將校の肩を掴んで目をまっすぐ見てやる

「大丈夫だ、俺を信じろ」

「!?!?!分りました」

そういつてその將校は持ち場に戻っていき変わりに兵の用意をさせていた忠が入ってくる

「ここまでは義真様の読み通りですね、このような策など私には思いつきもしませんでした」

「援軍の見込みがない状態で籠城しざるを得ないこの状況ならばこの策は奇策じゃなくて常道だ」

実際こうなるとは思ってなかったからな

「そうだとしてもこの戦は後世に語り継がれるでしょう」

「名づけるならば『長社城の火劇』ってところか？」

「ふふ、冗談が好きで」

「俺的には結構良いと思うんだが」

語り side

波才軍は長社城にある八つの門を一気に攻めるつもりでいた

元々八つの隊を一つの軍として動かしているため独自で動いたほう

が連携が取りやすいことに加え、防衛側と違いどこか一つの門を破ればいい攻城側として一つの門を集中して攻めるより攻める箇所を増やし敵兵力を分散させたほうが結果的には城攻めにおいて効果的であるからだ

実際には軍を二つ、もしくは三つに分け昼夜休まず攻め続けたほうが援軍が来ないこの場合には効果的なのだが所詮は農民でありそんなことを思いつけるはずがない

指揮官の波才は以前官軍にいたが役職は都伯（百人隊長）である、万を越す大軍を指揮した経験もなければ当然城攻めの経験もないそれでも何度も実戦経験のある空と張り合っているということは軍事の才能はあるのだろう

攻城開始まであと四半刻（30分）というところで不意に南東門を攻める部隊から火の手が上がった

火は風に乗って一気に燃え広がり波才軍はにわかに慌てはじめる

「落ち着け、冷静に対処しろ」

波才が必死に声を張り上げるが兵たちの耳には届かない

ジャーン、ジャーン、ジャーン

長社城が銅鑼の音が鳴り南東門が開く

「忠、行け」

「了解しました」

空が刀を抜いて号令を掛ける

「いけ、貴様らは誇り高き陛下の兵だ、漢王朝に弓引く逆賊なんかに後れをとるなよ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

閻忠が北地郡から連れてきた3000の騎兵を率いて反撃を開始する

南東門から出撃した彼らは確実に黄巾党の兵士を殺していく

その後官軍の將校たちが全ての門から出撃する

しかしこれは後世に『長社城の火劇』と呼ばれ皇甫嵩義真という名を広める舞台の第一幕にしか過ぎなかった

「ほ、報告します、て、て、敵軍は南東門からしゅ、出撃し、い、今は周りの兵を殺しながら火をつけているそうです」

「落ち着け、全軍に通達、火を消す部隊と官軍を止める部隊に分かれろ」

この状況で落ち付きを保っていられる波才を褒めるべきか、火を恐れて混乱している黄巾軍を嘲笑うべきか

そこに一つの情報が入る

「報告します」

「今度は何だ」

「後方から官兵達が現われ我らを襲っています」

波才の的確な指示で徐々に落ち着きを取り戻していた兵たちはまた混乱しだす

「馬鹿ないつの間に」

「それが・・・どうやら我らに降伏した兵達が招きいれたらしいです」

「埋伏の毒…いつからだ・・・」

思えば不審な点は幾つもあった

朱儁軍を破った時投降した兵が予想よりも多かった

朱儁の兵が本陣の情報を吐くのが早かった

此方に投降しなかった脱走兵の行方

総大将の脱走

そして・・・

羌族・匈奴に一度も漢の地を踏ませなかった『野心なき名将』皇甫
義真が何もせずただ籠城を選んだこと

波才の頭の中で幾つも情報が繋がる

「…騙された」

朱儁に、投降した兵に、そして皇甫嵩に

「くそ」

波才が兵を思いっきり殴りつける

ここで一つネタばらしをすれば空が閻忠に朱儁救出を命じたときに
兵に出した指示は朱儁軍の兵達にわざと投降するようにいう事だった

投降した兵には波才軍の状況を探らせておく

その状態で長社城に波才軍を呼び込みわざと兵達に脱走させる

脱走した兵達は互いに情報を送りあいながら波才軍に見つからないように軍備を整えていく

そして火の手が上がって四半刻後（三十分）わざと波才軍に投降した兵が招き入れる

波才軍の後ろを取った彼らは空からの命令通りに黄巾党の退路を塞ぐように火をつけていく

ただでさえ予想していなかった空たちの反撃に加えて退路を塞がれ始めた兵達は戦意を落としていく

「くそ、撤退だ、火が回ってくる前に脱出するぞ」

波才は伝令に全軍に伝えさせると自らが先頭になって道を開いていく

空は長社城の城壁から逃げていく波才軍を見ながら独り言のように呟く

「最後の手柄は譲ってやるよ…華琳」

空がそう言いおわるとほぼ同時に遠方より『曹』の旗がこちらに向かってくるのを空は確認する

朱儁が長社城から脱走した理由がこれだ

脱走するふりをして曹操軍に行き火の手が上がってから半刻後（一時間後）に逃げてきた波才軍に突撃するように指示する

これは危険な賭けだった

もし曹操軍が近くに居なければこの策は意味をなさない

だが空はこの策を実行した

華琳は絶対に来る

華琳と何年も暮らし互いに性格を知り尽くしているからこそその絶対的な信頼

そして実際に華琳は来た

「春蘭、秋蘭、季衣行きなさい、私が求めるのはただ一つ、敵将の首のみよ」

「「「御意」「」」

「これでいいのでしょうか？朱儁將軍」

「うむ、皇甫嵩將軍の命令通りじゃ」

「そうですか」

朱儁の話から華琳は今回空が使った戦術を解析していく

火計・埋伏の毒・時間差攻撃

空が今回使った“戦法”の一つ一つはごくあふりれた平凡なものだが今回の空の戦は華琳から見ても見事と舌を巻かざるを得ないほど見事なものだった

つまり空の兵法の極意とは自分の手元にある普通の“戦法”^{カード}を組み

合わせ新しい“戦術”^{カード}を作り出す『複合戦術』と言えるものなのだから
自分の考えられる幾つかの戦法から自らの手で別の新しい戦術を作り出す

それは奇しくも何？が彼につけた評価と酷似していた

結果だけいえば波才は逃げることに成功した、だが今回で波才軍が多くの戦死者を出し30000近くいた波才軍は4000までその兵を減らした

この戦いの後皇甫嵩義真という名と共に『野心なき名将』という評価が世に広く広まり空が頭を抱えるがそれはまた別の話

V S 波才〜第二部長社城の火劇〜（後書き）

戦闘描写は難しいということを改めて実感したflowerです
初めての戦闘描写ということでもかなり力を入れてみましたがどうだったでしょうか？

今回の戦は史実で皇甫嵩が行った火計を少しアレンジしたものです
途中の空のセリフ「戦いは臨機応変の策にあつて〜」というのは『後漢書』にある皇甫嵩伝にのっている言葉を引用＋少々変更したものです

田単の功績は興味を持った方はウィキで調べてください
感想お待ちしております

番外編く皇甫嵩伝のもう一つの外史く（前書き）

クリスマスなんてなければいいのに

番外編／皇甫嵩伝のもう一つの外史／

ふと窓から外を覗けば目に飛び込んでくるのは白銀の雪

月明かりに照らされて光るそれは天空の闇と交わりどこか神聖な雰
囲気を出していた

後の世まで名を残す詩人であれば無意識に詩を作ってしまいそうな
そんな幻想的な景色を背景に抱き合う一組の男女

男は女の後ろから手を回し女の美しい金髪に顔をうずめている

女は自らを抱きしめている男の腕に優しく触れながら淡く微笑んで
いる

彼らがいる部屋のすぐ下の階では彼らの部下が現在進行形で宴会を
していて彼らの不在に気付かない

はるか西方の国で生まれし聖人の誕生を祝う祭りはシルクロードを
通り硝子や葡萄酒とともに中華大陸にも伝わっていた

もちろん永き戦乱により荒廃した中華大陸でそのような祭りを行う
余裕は物資的にも、精神的にもなかった・・・去年までは

皇甫嵩義真

自らを凡人と評しながら自らの理想と夢のために幾多の英雄と戦い

去年自らの学友であり、親友であり、思い人である曹孟徳を破りこの大陸の覇者になった男

彼のもとで中華大陸は徐々に嘗ての繁栄を取り戻し民には笑顔が溢れていった

その結果このような祭りを行うほどの余裕が出来たのだ

「…皇帝陛下がこんなところで側室の一人と居ていいのかしら？」

自らを側室と称しながら女の言葉に悲嘆の色はなかった

男の正妻は漢帝国最後の皇帝である献帝劉協だった

無論それは戸籍上の話であり真相は男の正妻となることで男に権力の移譲をさせ悠々自適の生活を送るためだということは国の中枢にいる人間なら誰でも知っていることだった

男はそんなことを分かっているだろうと言わんばかりに女を抱きしめる力を強くする

女は男の返答に喜色の色を浮かべながらも体を反転させ

「あなたの言葉で聞きたいの」

そう言って男に口づけをする

長く濃密なディープキス

女の美しい金髪と男の絹のような銀髪が絡まり離れるその光景は先に書いた雪と相まって言葉にするならば妖精のダンスのようだった

「…ぷは・・・華琳愛してるよ」

そつと女の耳元でささやく男の言葉は女の問いに対する答えではなく情熱的な愛の言葉

「…なっ」

またたく間に女の顔が赤くなっていく

「…華琳」

そつと男の手が女の胸に触れる

「・・・空のバカ」

そっぴいながら女は男の服を脱がしていく

「これからどうするつもりなの？」

生まれたままの姿で抱き合う二人が語るのはこれからのビジョン

先ほどの恋人同士という私的な関係から皇帝と丞相という公的な関係へと一瞬で切り替わる

「まずは農業改革からだな

人口が減りすぎて空いた土地、荒れた土地が多すぎる

…屯田兵でも作るか……いや…」

男は思考の海へと旅立つ

女は男のその顔を見つめながら男の背中に入れ墨をなぞっていく

男の背中には青竜・白虎・玄武・朱雀の四神と雉・燕・蛟・鷹・鳶
という五匹の動物が日輪を囲んでいる絵が刻まれていた

四神は中華大陸を、五匹の動物は五胡と呼ばれる？・羌・匈奴・鮮卑・羯の単于の真名でありその民族を、日輪は皇帝を表し日輪の下で全てが光を浴びるという男の理念が刻まれていた

この時代入れ墨は罪人や異民族に刻まれるものであり自らの意志で刻ませた男がどれだけ異質かが窺える

だがその姿勢はこれまで分かり合うという選択をしてこなかった五胡の心を溶かし和解とまではいかなかったが以前より関係が改善された

「……えい」

そんなかわいい声で出されたデコピンは男を思考の海から引き戻す

「……痛いな」

「……目の前の恋人を忘れて別の女のことを考えていた男へのお仕置きよ」

「バレてた？」

「農業改革は朱里と穩の担当よ、彼女たちとの会話でも考えてたんでしょ」

勝ち誇った顔で言う女に男はため息をつく

「…敵わないな、華琳には」

「私はあなたの妻よ、夫の事が分からないとでも？」

先ほどの側室発言から一転して妻と発言する女

それは数多くいる側室の中で自分が一番愛されているという自信と自負

実際この聖なる夜に男が共に過ごす相手として選んだのは彼女であることからしてそれは間違いないだろう

「本当にいい女だよ、華琳は」

男は女を抱き寄せ口づけをしようとする

ガタンッ

不意に扉が開く

「華琳さん、抜け駆けとは酷いです」

「あら、抜け駆けとは心外ね」

そこにいたのは男の侍女長である月

後ろには男の数十人の側室たちがいた

皆敵意の色を浮かべていた

・・・何故か男に

「って俺かよ！」

「当たり前でしょう、このような日に私たち配下の将ではなく降将の…それも敵の大將と過ごしているとすればそれはご主人様の責でしょう」

「あわわ、もげろですう」

おとしやかに理由を語る妙齡の女性は男の腹心である紫苑

毒を吐いたのは男の軍師である魔女っ娘ヒナリン

「…はあ、わかったよ」

そう言いながら男は服を着ていく

「とりあえず全員相手は無理だからな・・・枯れるから」

「あら、私と桔梗と雛里ちゃんと月ちゃん相手に勝った方とは思えない言葉ですね」

「あれは気分がよかつたからだ」

そう言つて男は側室達を伴つて大風呂へ

こうして聖人の誕生を祝う聖なる夜は新たな命の誕生を願う性なる夜に変わるのだった

・・・ちくしょう、もげろ

番外編く皇甫嵩伝のもう一つの外史く（後書き）

クリスマスなんて滅びればいいんだ

そんな気持ちで今日を過ごすflowerです

余りの暇さについて書いてしまいました

今回の話は題名の通りこういう展開もありだなと思った設定を膨らまして書きました

本編とは全く関係ありません

別伝の意味は『鳳徳別伝』（短編の方）を見てください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5110w/>

真・恋姫†無双『皇甫嵩伝』～野心無き名将～

2011年12月25日14時37分発行